

- 1985年10月 同大学・中東研究所 主任研究員(～1994年3月)、同研究所・主幹(～1988年3月)
1986年4月 国際大学大学院国際関係学研究科・専任講師(～1989年3月)
1986年12月 流沙海西奨学会賞受賞
1989年4月 国際大学大学院国際関係学研究科・助教授(～1997年3月)
1990年8月 ケンブリッジ大学中東研究センター・客員研究員(～1991年7月)
1994年12月 サントリー学芸賞(単著『現代中東とイスラーム政治』)
1997年4月 国際大学大学院国際関係学研究科・教授(～1998年3月)
1998年4月 京都大学東南アジア研究センター・教授(4月1～8日)
1998年4月 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科(ASAFAS)・教授(～2019年3月)
1999年1月 法学博士(京都大学)
2000年6月 日本比較政治学会・理事(～2006年5月)
2002年11月 毎日出版文化賞受賞(共編『岩波イスラーム辞典』)
2003年4月 日本中東学会・会長(～2005年3月)
2005年7月 大同生命地域研究奨励賞受賞(「イスラーム政治思想と現代中東地域研究」に対して)
2005年10月 日本学術会議・第1部会員、地域研究委員会委員、地域研究基盤整備分科会委員長(～2011年9月)
2006年12月 ASAFAS 附属イスラーム地域研究センター・センター長(～2014年3月)
2012年10月 名誉博士(イスラーム文明学, マレーシア国民大学)
2012年4月 紫綬褒章受章(地域研究の基盤整備と発展, 特に中東地域研究とイスラーム学の発展への貢献に対して)
2013年6月 京都大学孜孜賞受賞(京都大学における中東地域研究, イスラーム学の研究の発展への貢献に対して)
2014年4月 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・研究科長、京都大学・評議員(～2016年3月)
2015年4月 ASAFAS 附属ハダリー・イスラーム文明研究センター長(～2019年3月)
2019年1月 IIUM-ISTAC(マレーシア国際イスラーム大学・国際イスラーム思想・文明研究所)国際諮問委員(～現在)
2019年4月 京都大学・名誉教授、立命館大学立命館アジア・日本研究機構・特別招聘研究教授、同大学アジア・日本研究所長(～現在)
2021年3月 *Oxford Journal for Islamic Studies* 編集諮問委員(～現在)
2020年4月 立命館アジア・日本研究機構・副機構長(～現在)
2024年4月: 立命館アジア・日本研究機構・招聘研究教授(～現在)

中東地域研究とイスラーム思想史の営み：50年を超えて

はじめに

「知の先達たちに聞く」シリーズにお招きいただき、どうもありがとうございます。実は、このシリーズは私が20年ほど前に提案したもので、自分自身も年齢を重ねてお招きいただくこととなり、感慨深いものがあります。

私自身の専門は、現在は中東地域研究、イスラーム研究、比較政治学、国際関係学、比較文明学という順に、分野を言っております。実際に、これらの分野で活動を続けてまいりました。特に、日本中東学会、日本比較政治学会は、自分自身も設立発起人に名を連ねたということもあって、今日に至る学会の発展を思うと、とても嬉しく思います。

私がメンバーとなっている8学会を見ると、多様な学会や分野に関係しているという印象をお持ちになるかもしれません。地域研究は学際的分野だという主張に賛同して、それに沿って欲張ってきた面もあるかと思います。ピンポイントで一番関係している研究領域をあげるならば、2005年に大同生命地域研究奨励賞をいただいた時に「イスラーム政治思想と現代中東地域研究」に対してということだったのですが、この2つの分野かと思います。

私がやってきましたことを、別な面から言うと、アラビア語で書かれた原典をたくさん読んでそれを解析し、それが読まれている社会の動態と結びつけて、現代社会の問題を考えるということです。アラビア語は文法構造が時代を超えて同じなので、古典も現代物も読みます。アラビア語の原典は、もちろんアラブ世界で非常にたくさん刊行されていますが、1979年のイスラーム革命以降のイランでもアラビア語出版が非常に盛んですし、非アラブ圏でもイスラーム世界の知識人の共通語として、広く使われております。そこから、より広域的な「イスラーム世界論」という分野をも開拓してきました。

アラブ世界ないしはアラブ圏は、アラブ連盟の加盟国で示されます。私が訪問・滞在したことのあるアラブ諸国は22カ国のうち16カ国です。全部回りたいと思っていた時期もありますが、そこまではたどり着かないかもしれません。

イスラーム世界なりイスラーム諸国という場合、国際機構であるイスラーム協力機構の加盟国を指す場合があります。パレスチナも含めて正式メンバーが57、オブザーバー国が5つあります。そのほか国内にムスリム・マイノリティがいて存在感を持っている国が50～60ありますので、合わせると世界の国の3分の2ほどがイスラームと関わりがあることになります。私が訪問できたのは、そのうちの3分の1くらいだと思います。特に20世紀末から、イスラーム世界論や広域的なイスラーム地域研究を論じるようになって、できるだけ多くの国を実体験するように努めてきました。

地域研究は、現代を研究する研究領域で、その場合の「現代」は、現代に先立つ近代を含めるとしても17～18世紀以降、特に第1次世界大戦後、場合によっては第2次世界大戦後が対象とされることが多いと思います。もちろん、中東のように、古代オリエント文明の時代からの歴史と文明の蓄積がある地域では、歴史をないがしろにして現代を理解することはできません。

とはいっても、逆に、物事を歴史的な起源に還元して議論するのは、やりすぎだと思います。たとえば、シーア派はイスラーム初期に当時のウマイヤ朝の体制に反旗を翻して勃興した、だから彼らは革命的で、イランでの革命もそこから説明できる、というような考え方ですね。もっと流布している俗説としては、キリスト教とイスラーム2000年の対立、というような言い方もあります。私は、地域研究者として、現代の対立は、起源が最近の100年から200年くらいのうちにある、ということを主張してきました。それより前の話は、歴史的背景であって、紛争の因果関係をそこから直接説明できるわけではありません。

その一方で、「イスラーム復興」に代表されるように、「初期の理念に戻れ！」というようなスローガンが大きな力を持つことがあります。これも、歴史が現代を決めるのではなく、現代の歴史観や歴史をめぐる思想が今の時代に影響力を持つということです。そして、思想には、必ずそれを

唱える思想家と、その思想を受け入れる社会や文化というものがあります。さらに、政治をめぐる場合、政治の実態と社会と思想の関係がいつそう問題となります。それらの動的な関係をしっかり考えるというのが、私の政治思想研究の立場です。

アラブ・イスラーム研究との出会い

続いて、私がどういう道筋で研究者となったか、研究遍歴をお話したいと思います。題名に「50年を超えて」と書きましたが、これは18歳でアラビア語を始めてから53年になりますので、そう数えております。そこで研究を始めたわけではありませんので、研究前史を含むことになりますが、中東の現地と向き合ってきたという意味で、あえて数えさせていただきたいと思います。

パワポに「学びの形成期」と書きましたが、中学生くらいの頃から、将来は翻訳家とか、世界を回って紀行文学を書きたいと思っておりました。結果論から言えば、当たらずとも遠からず、というような職業に就いたかと思います。その道筋において、高校生の時に3つの出会いがありました。1つ目は、浅倉久志先生(1930-2010)というプロの英米文学翻訳家に、英語の本を読んだり翻訳したりする手ほどきをうけたことです。浅倉先生が翻訳なさった中には、ハリソン・フォードが主演した『ブレードランナー』というSF映画の原作、フィリップ・K・ディックの『アンドロイドは電気羊の夢を見るか?』(ディック 1968)がありますので、浅倉先生のお名前を聞いたことがある方もいるかと思います。浅倉先生には、作者の意識の流れに沿って読む、という極意を教わりました。

次が、後に国立民族学博物館を設立して館長になった梅棹忠夫先生がお書きになった岩波新書の『知的生産の技術』(梅棹 1969)との出会いです。あとで、これに絡むお話をしますが、この本に感銘したのが知的生産者、つまりは研究者をめざす元だねになったと思います。

3番目は、小田実さんという作家が世界を見て回った手記の『何でも見てやろう』(小田 1961)でした。アジアの現地に対する関心は、このあたりに発するかと思います。

それから、東京外国語大学のアラビア語学科に入学して、アラビア語を始めました。奴田原陸明先生、エジプト人教授のアリー・ハサン・エルサムニー先生から語学を学びました。また、板垣雄三先生からパレスチナ問題について教わりました。

外大時代に、アジア・アフリカ作家会議という組織で、事務局の仕事をすることがあります。それは、この作家会議が最初のイベントとして、「日本アラブ文化連帯会議」を1974年に開催するところだったからです。この会議には、アラブの作家として、エジプトの文化大臣だったユースフ・セバーイーさん(1917-1978)、パレスチナの詩人で英雄的な人気があったマフムード・ダルウィーシュさん(1941-2008)、レバノンの大詩人アドニスさん(1930-)などが訪日なされて、私もそういう皆さんに直接会って、ものすごく刺激を受けました。

日本側も作家たちですから、有名な人もたくさんいましたが、代表の野間宏さん(1915-1991)が非常に印象的でした。大江健三郎さん(1935-2023)は、のちにノーベル文学賞(1994)を受賞なさいましたが、この文化会議が終わった後、事務局をねぎらうと言って私たちをご自宅に招待して、ご馳走してくださったのを懐かしく思い出します。

ノーベル文学賞作家と言えば、アラブ人で唯一の受賞者ナギーブ・マフフーズさん(1911-2006)に、カイロに留学してからお目にかかったのも嬉しかったです。当時は、一生懸命、カイロの伝統的な街区を舞台とする彼の小説を読んでいました。ただし、お目にかかったのは、ノーベル賞(1988)をお取りになるより前のことです。

私はアラビア語学科の学生でしたが、半世紀も前の日本だと、日常でアラビア語に触れる機会はほぼありませんし、文化連帯会議で本物の作家たちに出会って刺激されたためか、現地に行こうと決心しました。エジプト政府招聘学生になることができましたので、カイロに留学しました。

また、私が東京外大に入って2年目に、第4次中東戦争、アラブの現地の名称では「10月戦争」「ラマダーン戦争」が起き、戦争や平和、パレスチナ問題、アラブ民族主義のことが大きな焦点であることを感じました。この年に、板垣雄三先生が外大で教えていらした講義に出ていましたので、パレスチナや「アラブの大義」についても多くを学ぶことができ、後に中東地域研究に向かう素地ができたと思います。

なお、後で申し上げますように、私の関心はエジプト現地でアラブ民族主義からイスラーム復興に移りました。パレスチナの解放運動でイスラーム的な側面が出てくるのはずっと後になりますので、1983年にガザと西岸地区のフィールドに行った際に、イスラーム的な運動の萌芽があることはわかりましたが、パレスチナのイスラームを実際に研究対象としたのは1987年のハマース（イスラーム抵抗運動）の登場以降です。1994年に、現地調査と原典に基づいてハマースを論じた日本で最初の論文を書きました（小杉 1994d）。パレスチナ問題への関心が10年以上経って、ようやく形になったわけです。

話を元に戻すと、エジプトに行った当初は、アラブ民族主義に非常に興味があり、また小説に強い関心を持っておりましたので、政治的な小説を自分の専門にしようと思っていました。

私が特に好きだったのは、ユースフ・イドリース（1927-1991）という作家です。彼の書いた『ファラハートの共和国』という短編を翻訳したこともあります（イドリース 1978）。現地で彼にお目にかかった時に、とても印象深かったのは、彼の日本訪問の話でした。東京に滞在中に、夜遅くに銀座を歩いていたら、そこで誰も見ていないのに一人で一生懸命に道路工事をしている人がいたのですね。それで、監督者はどこにいるんだろうと、彼は見渡すのですが、誰も見当たりません。エジプトでは、監督がいらないのに働く人はいらないのに、日本では誰も見ていなくても仕事をするのかと感動した、というお話をなさっていました。もう1つ言われたのは、小説をその社会を理解するための道具にしないでください、ということでした。小説を素材として社会を研究するという手法もありますが、イドリースさんは、我々の作品は作家の作品として理解してもらいたい、と強くおっしゃっていました。だからと言って小説研究をやめたわけではありませんが、エジプトに暮らしてみたら、小説に表現された政治よりも政治状況そのものに目が引かれました。

特に、イスラームという宗教が価値体系として実体を持っている社会がそこにある、ということに驚きました。後に「イスラーム復興」という言葉を使うようになりましたが、1970年代後半のエジプトでは、すでにイスラーム復興が進んでいました。ただ、復興の基盤となるイスラーム的な価値観は、それ以前の社会の中にも根付いていたと思います。さらに、1978年には、イランで大きな反王政運動が起きました。アメリカのCIA（中央情報局）が、これはまもなく鎮圧されると予想して、革命の成就によって面目を失った事件です。翌79年2月には、パリに亡命していた指導者ホメイニ師が凱旋帰国し、「中東最強」と言われていた王政が崩壊しました。いよいよ、イスラーム復興が顕在化したわけです。

私自身の政治研究は、イスラーム社会の政治思想だけではなく、革命・戦争・内戦を1つの軸として展開していきます。戦争と平和に関わる事件などで、中東現地で体感を得たものをあげると、次のようになります。

1977年：1月のカイロの物価暴騰（戒厳令で市内各所に戦車）
1977年：サダト大統領の和平イニシアチブ（11月のエルサレム電撃訪問）
1981年：「戦勝記念日」におけるジハード団によるサダト大統領暗殺事件
1981年：イラン・イラク戦争の前線訪問（アフワーズから国境地帯へ）
1982年：イスラエル軍占領下の西バイルート、南レバノン（ユニセフの仕事）
1983年：被占領下の西岸地区、ガザでの調査
1991年：湾岸戦争開始前後のインド洋から紅海・地中海を航海（アラビア海、イエメン、エジプト、キプロス）

特に大きな経験となったのは、1982年のレバノン戦争の際に、レバノン現地の取材に行く報道写真家の三留理男さん（1938-2022）に通訳兼ライターとして同行したことでした（三留 2012: 266-269）。三留氏は国連の恒久 ID カードを発行された、まれなジャーナリストで、この時もユニセフの仕事でした。イスラエル軍がバイルートや南レバノンにいる PLO（パレスチナ解放機構）のゲリラ部隊をレバノンから追放するために南レバノンを占領し、首都のバイルート西部（西バイルート）を包囲しました。その包囲下の西バイルートに、国連の手助けで入り込み、現場を取材したわけです。

このレバノン戦争は、1975年から1990年まで続く「レバノン内戦」の重要な一幕で、パレスチナ・ゲリラと左派の改革派勢力が実権を握って、反イスラエ尔的な政府を作ることを恐れて、イスラエルがレバノン右派と連携して、軍を侵攻させたものでした。その狙いは当たり、パレスチナ・ゲリラはレバノンから撤退せざるをえなくなりますが、しかし、代わってヒズブッラー（ヒズボラ）というイスラーム的なレジスタンス組織が立ち上がります。

それまでのレバノンでは、エジプトではとくに勢力を失ったナセル主義者の民兵組織が大きな力を持ってもいたのですが、民族主義、世俗主義の諸派はレバノン戦争以降に勢いを失い、ここでもイスラーム復興が顕在化しました。ただ、その交代期のレバノン戦争の頃は、宗教や民族、政治イデオロギーが入りこんでいて、誰が誰となぜ戦っているのかを理解するのは、非常に困難でした。ところが、西バイルートの現地で取材しているのですから、それを大急ぎで理解しないといけません。本や雑誌、新聞、現地での取材を通じて、自分なりの政治分析の布置図を描き出すということをも必死でやることを通じて、後の研究にも役立つ手法を会得したように思います。

同じことは、三留氏とイランを訪れ、イラン・イラク戦争の前線を取材した時にも起きました。イスラームが現実政治に関わるイラン革命やイラン・イラク戦争の不可解さを説明するために、スンナ派 vs シーア派という図式が、その頃よく使われていましたが、現在におけるシーア派とは何かということを、取材を手伝ってくれるイラン人とあれこれの議論をしながら、自分なりの絵柄を作っていったことを思い出します。

そうした場合に役立つのは、英語で書かれた研究書（の中の良書）とアラビア語の原典資料です。両方を読み比べながら、そして現地のフィールドでの収穫を加えて、バランスが取れている分析を生み出すようにします。

その国や地域に関する良書は、フィールドと結びつけて読むと、いっそうよくわかります。いつ読むかという、3つあります。フィールドに行く直前に読む、フィールドで読む、フィールドから戻ってすぐに読む、という3つです。行く前に読んでおくと、現地での理解の助けになるのですが、あらかじめ何が良書であるか、わかっているとは限りません。現地の書店でそのような本が見

つかる、ということも起こります。「一期一会」という言葉がありますが、本との出会いでもそういうことがよくあります。

「バランスが取れている」と言いましたが、そうするには、先行研究をきちんと踏まえるということと、それを批判的に乗り越えるという面のバランスが大事だと思います。皆さまもご存じのように、イスラームや中東を研究する上では、エドワード・サイードの『オリエンタリズム』(サイード 1993) を踏まえる必要があります。邦訳が 1993 年に出されたことは、日本の学界にとっては非常に大きな貢献でした。

オリエンタリズムという英語は、もともと東洋学を指していますが、サイードはそれが西洋が他者(＝オリент)を支配するための知として機能したと、批判的に分析しました。欧米におけるイスラーム研究や中東研究は、全体としてそのようなオリエンタリズムであるという印象も強まり、それを乗り越えるような研究が求められるようになったわけです。

ただ、サイードの貢献が絶大だとしても、サイードはイスラーム世界や中東の研究者ではありません。彼の研究が素晴らしいのは、文芸批評の分野で西洋の言説を徹底して解析したからで、その意味では彼は西洋に関する専門家であって、オリентの専門家ではないのです。むしろ、西洋の言説の中のオリентは実在ではない、ということに彼のポイントがあります。その一方で、地域研究者は、対象とする地域を実在として、それがどのような固有性を持っているかを探究することが仕事です。その時に、オリエンタリズムのように、支配の対象として相手の地域をめぐる言説を勝手に作ることなく、地域にとっての他者である研究者にとっても現地の人びとにとっても納得のいく分析を提供する必要があります。

東洋学の成果についても、東洋学がすべてサイードの言うオリエンタリズムだと言って否定することなく、1つ1つ吟味して、先行研究として首肯できる部分は取り入れるべきだと思います。科学的な研究は、どの分野でも先行研究をきちんと踏まえるべきですが、自然科学では 100 年以上前前の研究に言及することはあまりないと思います。それに対して、人文科学、社会科学では千年、二千年というスパンで言及がなされます。民主主義を論じる時には古代ギリシアのプラトン(前 427-347)、国際政治学ではトゥキディデス(ツキジデス、前 455-60-400 頃)にしばしば起点が置かれ、現代のイスラーム哲学を研究するにしても、古代ギリシアからファーラービー(870 頃-950)やイブン・スィナー(980-1037)を経由して今に至る知の連鎖を踏まえる必要があります。

そのような意味で、私は研究とは長い歴史を持つ言説のネットワーク化によって成立していると考えてきました。学説史を踏まえることは、とても大事です。ある時、オリエンタリズムを乗り越える近年の研究を現行の支配的なパラダイムだと考えて、その批判をする研究者が、単に元のオリエンタリズムに戻ったようなことを言っているのを聞いて、学説史を知ることの重要性をあらためて認識しました。この「先達たちに聞く」シリーズを提案したのも、長いスパンで学説史を体得している先達の話聞いて、研究状況や時代のパラダイムがジグザグを描きながら展開してきた様子を若手の研究者が「耳学問」することに意味があると考えたからでした。

研究者としてのスタート

日本に帰ってきた時、とても幸運なことに、その前年に開学したばかりの国際大学という、日本で最初の大学院大学の仕事を得て、1984 年 4 月に助手として赴任しました。「国際大学」という名前も、日本で最初のものでした。その後、「～国際大学」という形で、都市の名前や専門性を付し

た国際大学がたくさんできましたので、ただの「国際大学」と伝えと、「どこの？」と尋ねられることもありました。英語では、International University of Japan なのですが、日本語では、日本国際大学とは名乗っていません。

この大学は、日本の財界・産業界が資金を提供した私立大学で、最初は、国際関係学の修士課程だけで、企業派遣の院生と留学生が多いという特徴をもっていました。英語が学内公用語で、私も英語で授業をしていましたが、たとえば「民族とエスニシティ」という科目では、受講者が15人くらいいると、出身国が10くらいはあって、クラスそのものが民族とエスニシティを体現しているようなことが非常に面白かったです。

私が赴任してすぐに、附属の中東研究所が設立され、主任研究員と、事務方のトップである主幹という役割を同時に務めることになりました。新しい組織を作るという点でも、いろいろな経験を積むことができました。いっしょに仕事をしていた中東が専門の先生方は、私と同じように原典を重視する皆さんでしたので、アラビア語やペルシア語の原書を集めるという方針を立て、5年ほどで大学の附属図書館にアラビア語蔵書数が日本で第2位のコレクションを構築することができました。

自分自身の研究については、この大学での国際関係学が「国際研究（国際政治学、国際経済学）」と「地域研究」の結合に立脚していましたので、地域研究と政治学および国際政治学を自分の専門とする方針を立てました。当時の助手は、現在の助教とは違って授業を担当することはなかったので、むしろ高名な先生方をお願いして授業を受講させていただきました。

政治学では、中央大学学長や日本政治学会理事長を歴任なさった重鎮の原田鋼先生（1909-1992）に師事しました。権力とその正当性（レジティマシー）をめぐる諸問題を徹底して教えていただきました。原田先生が親しかったということもあり、一度、丸山眞男先生（1914-1996）を国際大学にお招きくださったのも、政治学のレジェンドに直接お目にかかる機会となり、とても幸運なことでした。

国際政治学では、日本国際政治学会の理事長としてその発展に大きく寄与なさった細谷千博先生（1920-2011）の薫陶を受けました。さらに、日本の政策決定過程論の草分けと言える宮里政玄先生（1931-2019）から、モデルと実証的事例の関係をしっかり手ほどきしていただいたのが、ありがたいことでした。宮里先生がお訳しになったアリソンの『決定の本質：キューバ・ミサイル危機の分析』（アリソン 1977）をしっかりと読み込みました。のちに湾岸危機・湾岸戦争（1990-1991）が起きた時には、イラクのサッダーム・フサイン政権がなぜ冒険的なクウェート占領をおこなったのか、米国のブッシュ（父）政権はなぜ、湾岸戦争に踏み切ったのかを考える上で、政策決定過程論で学んだことがとても有益であったことを思い出します。

なお、教えを受けた先生方の顔ぶれを見てもおわかりのように、私の学んだ政治学は、昨今のように経済学に範を取って計量化を進めたり、より「科学化」して予測ができるようになりたいという傾向とは違います。革命や戦争は1つ1つがユニークな現象で、予測することは容易ではありませんし、政治学者の仕事は起きた現象を的確に分析できることで、前もって予測することではないと思います。計量を重視する若手の方から見れば古くさいかもしれませんが、計量を推し進めてデジタル化できない部分を軽視してしまうことを、むしろ恐れています。

さて国際大学に勤めた当時は、中東地域研究も勃興期で、板垣雄三先生に誘われて、日本中東学会の設立発起人に加わりました。1984年12月に学会の発起人会が開かれましたが、その時、地中海学会を代表して挨拶なさった牟田口義郎先生（1923-2011）が「中東学会は当然もう存在してい

るだろうと思っていました」とおっしゃったのが、印象に残っています。牟田口先生は、もともと朝日新聞の特派員としての中東報道の先駆者で、独立まもない頃のクウェートについて『石油に浮かぶ国：クウェートの歴史と現実』（牟田口 1965）という、題名もセンスのよい名著をお出しでした。

中東学会は、梅棹忠夫先生（1920-2010）が初代会長、板垣先生が事務局長としてスタートしました。1985年に東京大学教養学部で開催された第1回研究大会では、その名もズバリ「イスラーム復興運動」をテーマとするパネル・ディスカッションがおこなわれ、私が若輩者ながら、基調報告を担当しました。「イスラーム復興」とそれを追求する多様な運動という考え方を、カイロ時代からいろいろな雑誌に書いていましたので、その議論をあらためて研究者の皆さまに向かって表明する機会となったのは、ありがたいことでした。

なお、イスラーム復興やイスラーム復興運動という概念を、日本で研究の立場から明確に提案したのは、私が1984年に『国際問題』という雑誌に出した「イスラームの復興」（小杉 1984）という論文だったと思います。

イランでの革命や、1981年のジハード団によるサダト大統領暗殺事件など、イスラーム世界の各地で生起している現象をどう捉えるべきかは、欧米でも日本でも大きな問題となっていました。1980年代前半には、いろいろな用語や概念が提案され、混乱をきたしていましたが、その後 **Islamic Fundamentalism** という語が欧米で普及しました。ファンダメンタリズムは、北米のキリスト教（プロテスタント）の思想運動に起源があり、近代への挑戦や戦闘性というニュアンスが非常に強く、欧米ではそこにイスラーム復興との共通性を見いだしたのだと思います。キリスト教の文脈ではそれまで「聖書根本主義」と訳されていましたが、この時の日本では、なぜか「イスラーム原理主義」と訳され、非常に便利なレッテルとして普及しました（人類学者の大塚和夫先生（1949-2009）の指摘によって、日本社会での用法ではイスラームは伸ばし音なしで書かれますので、不適切なレッテルとしてのイスラーム原理主義は、イスラーム原理主義とは書きません）。

私は原理主義という表現に強い疑問を感じていました。大きな理由は、対象を十分に分析せずに、外からのレッテル貼りになっていることと、地域研究で用いる分析概念としては役に立たない、ということです。特に、近代性への挑戦という「脅威」のパーセプションがこの命名法の根底にあることが問題でした。そこには、欧米がイスラーム圏に対して持ち続けてきた脅威感がありますから、イスラーム原理主義とイスラームそのものとどう区別するのか、と問うと、「イスラームはそもそも原理主義的な宗教なのだ」というような同意反復の典型のような答えが返ってくる状態でした。

そのような誤認の大きな一因は、伝統と復興の違いがわからないことにあります。「イスラーム復興を唱える人たちは伝統主義者だ」というような誤解が、当時は広く見られました。伝統はその前の時代からの継承が軸で、復興の主張は伝統を否定するからこそ起こります。それを説明するために講演などでは、日本の例を出して、幕末の「王政復古」は近代国家へ向かう道であって、古い時代に戻ることでなかったという比較もよく使いました。

研究者になる前の私は、アカデミズムとジャーナリズムの中間の道を考えていましたので、最初の著書はペンネームで『イスラームの挑戦』（加納 1982）を上梓しました。その中で、イスラームをめぐる伝統主義、近代主義、復興主義の3つが拮抗しているのであって、一方に近代があり、他方に伝統や復興があって、両者が対立しているのではない、ということを主張しました。後にあるアラブの国で、日本大使館にお勤めの外交官に、私が『イスラームの挑戦』の著者とわかって、

「あの本で、本当にストンと納得できました」と激賞されたことがあり、現場の実務家の役に立ったことをとても嬉しく思いました。

それ以前の中東をめぐる研究では、近代化や世俗的な民族主義が主たるパラダイムとなっており、イスラームは近代化や世俗化の中で消滅していく（少なくとも衰退していく）という認識が広く共有されていました。だからこそ、イスラーム復興が起きて皆が驚いたのですが、草の根のイスラーム復興は1960年代から進んでいたにもかかわらず、現地で調査している研究者の目にそれが入らなかった、つまり優勢なパラダイムから外れていると認知さえされないということかと思います。

近代主義でも伝統主義でもない「復興」とは何か、ということを入れた論文が、日本中東学会の機関誌である『日本中東学会年報』創刊号の巻頭論文に採用されました（小杉 1986a）。従来のイスラーム理解ではスンナ派とシーア派は同じイスラームと言っても異なるという認識が強かったのに対して、イスラーム復興はスンナ派とシーア派の両者に共通する現象であり、現代イスラームは歴史的なスンナ派 vs シーア派というパラダイムからも離れて理解すべき、ということも前面に押し出して主張しました。

国際大学に勤めてからすぐに、民博での研究プロジェクトに招かれて、「現代イスラームにおける宗教勢力と政治的対立：カイロにおけるアズハル＝フセイン複合体とサラフィー主義」（小杉 1986b）という論文を書きました。これは、伝統と復興の対抗関係をカイロ旧市街での観察と調査から実証的に描いたものです。これに対して、1986年12月に流砂海西奨学会賞をいただくことになりました。この賞は、古代日本に関する「騎馬民族征服説」で有名な江上波夫先生（1906-2002）がお創りになったもので、「流砂」は中央アジア、「海西」は西アジアを指しています。そのような地域を研究している若手を顕彰する賞で、若手研究者の登竜門ともなっていました。授賞式では推薦者が受賞者を紹介してくださるのですが、私を推薦してくださった中村廣治郎先生（1936-2023）が私のことを「イスラーム復興の現象が広まって、皆がとまどっている時に、彗星のように現れた」とおっしゃってくれたことを思い出します。

さきほど述べましたように、日本に戻ってくる前の私はアカデミズムとジャーナリズムの間をめざす物書きだったのですが、日本中東学会年報の論文、この賞をいただいた論文までの2年くらいで、研究者としての物書きに転換しました。

その後は、学術論文を書くのと、書籍をいろいろな形で出すことに注力しました。最近、私が直接、単著、共著、編著として作った本を数えてみましたら、日本語、英語、アラビア語を合わせて70を超えていました。それらの本の題名をチェックしてみましたら、ほぼ半分に「イスラーム」という語が入っています。やはり、イスラームやイスラーム世界を中心に研究を展開してきたという面が強いと、あらためて感じました。

ポストモダン研究との交流

さきほど、サイドの『オリエンタリズム』のことを申し上げましたが、フーコーの影響を受けたサイドを含めて、1980年代以降は、ポストモダン研究からの影響も強く受けました。ポストモダンは近代からの脱却をめざす思想や芸術・学術の運動ですが、近代という「迷路」に西欧は（ひいては人類は）なぜ、どのように入り込んだのか、ということを知ることによって、多くのポストモダン研究が貢献してくれました。西欧におけるイスラーム研究は、イスラームを前近代、イスラーム復興を反近代と否定的に見る傾向が強かったため、近代的な視点に内在する問題を明らかに

してくれるポストモダン研究は貴重な価値を持っています。

私の場合は、特にフーコーの『監獄の誕生』(フーコー 1977) などによって、自由刑(自由を奪う懲役刑、禁固刑など)をよいものと思い、身体刑(鞭打ちなど)を前近代的で野蛮なものと思うメンタリティそのものが身体近代的管理によって構築されたことを、驚きをもって学びました。そうすることで、たとえばイスラーム刑法について、イスラーム法がなぜ自由刑を重視してこなかったのかを新しい視点から見るができるようになります。

大型プロジェクトの時代

今では、イスラームや中東に関わる大型研究プロジェクトはたくさんあり、それが当たり前のようになっていますが、日本中東学会ができる以前は、そうではありませんでした。大型プロジェクトの嚆矢は、1988年に始まった3年間の「イスラームの都市性」(研究代表:板垣雄三)です。このプロジェクトでは、イスラームの歴史的研究を、それまでの日本の「世界史」の王道であった中国、西欧の研究者といっしょに比較研究するという狙いがあり、そもそも「都市」は西欧や中国で始まったのではなく、古代メソポタミアで始まり、その都市性はイスラームに継承された、という主張もこめられていました。

そのような共同研究をした結果、中国や西欧を専門とする先生方が「イスラームにも重厚な歴史があり、これほどまでに研究も進んでいるのか」と認識なさったのが、このプロジェクトの最大の成果だったように思います。

そして、それを継承したのが、1997年に始まった5年間の「新プログラム方式によるイスラーム地域研究」プロジェクトです。正式名称は「現代イスラーム世界の動態的研究:イスラーム世界理解のための情報システムの構築と情報の蓄積」と言います。「新プログラム方式」は、文科省の側での「新プログラム方式による創生的基礎研究」という新種のやり方のことを言っています。これは公募ではなく、文科省サイドから企画して、重要な基礎研究の分野を強化しようとするものでした。今から思えば、イスラーム世界について研究を強化する必要があることを、政府の側でも十分に認識していたということでしょう。

「イスラーム地域研究」は略称として用いられましたが、この段階では、地域研究の1つとしてそのような分野を立ち上げることをめざしていたわけではありません。副題に「情報システムの構築」とありますが、イスラーム研究や中東地域研究における「DX(デジタルトランスフォーメーション)」の始まりとなりました。最初に「このプロジェクトでは、連絡はすべて電子メールでおこないます」と宣言されたのですが、多くの参加者が「電子メールって、何ですか?」と聞いてきました。しかし、5年後には、皆が当たり前のように電子メールを使うようになりました。

私はまだ国際大学に勤めていましたが、この大学にいたことのメリットは、インターネットの先進大学だったことです。1990年代に入って、インターネットが次第に普及しますが、国際大学はこの面で日本の草分けでした。私自身、90年代には自分でHTMLのタグをタイプして、ホームページを作っていました。今から考えると、まだ通信速度が遅くてまどろっこしいところもありましたが、最先端の技術とつきあうのは非常に面白いものでした。

イスラーム地域研究では、東京大学に拠点を置く第1班の班長を務め、プロジェクト全体の代表の佐藤次高先生(1942-2011)や、事務局長の小松久男先生と語らって、さまざまな研究活動を展開しました。それ以前の「イスラーム世界」というとアラブ研究が中心だったのですが、イスラーム世界を構成する諸地域を非常に広く対象とし、またそれぞれの地域の専門家も広域的な視点を養

い、しばしば地域間比較をおこなうようになりました。小松先生との共編『現代イスラーム思想と政治運動』（小松・小杉 2003）には、そのような広域性が非常によく現れています。

ちなみに、AFMA（アジア中東学会連合会）という組織があり、日本中東学会も加盟しています。これは中東研究についてアジアからの発信を強化するために、日本、韓国、中国の学会が合意して設立されました。中東研究というともっぱら欧米が発信している状態を改善する必要があるという認識が、その背景にありました。

連合会の会長は各国の学会会長が回り持ちで務めるルールで、私が中東学会の会長だった時（2003-2005年）にちょうど日本が連合会の会長をする番に当たっていました。その理事会で、モンゴルの新規加盟を審議した時、新参のモンゴルが日本の次に研究大会を招聘したいと言い出して、少し困ったことを思い出します。日本の次は中国、ということがすでに決まっていたからです。ところが、中国側が気を利かせてくれたのか、当該年は北京オリンピックで国中が忙しいので、譲っていいと言い出して、ことなきを得ました。

AFMAの大会は、2024年12月にも日本で開催されました（会場は同志社大学）。アジアからの発信をこれからも強化していくことが続くよう願っています。

京大時代

1998年に、京都大学で大学院アジア・アフリカ地域研究研究科（ASAFAS）が設立されました。私もここに呼ばれて、「イスラーム世界論」の教授として赴任いたしました。設立当時は、東南アジア地域研究とアフリカ地域研究の2専攻で、東南アジアの中に「連環地域論講座」が入っていました。この講座は、南アジア、西アジアを対象としており、これがあるからこそ、それが「連環（つなぐ環）」としてアジア、アフリカを結びつけるという仕組みでした。

なお、東アジアが入っていませんが、中国研究をはじめ、京都大学には長年の東アジアの研究蓄積がありますので、新研究科はアジア・アフリカと言いながらも、東アジアを対象とはしない形となりました。

また、地域としては南アジア、西アジアと言っていますが、研究領域はヒンドゥー世界論、イスラーム世界論と名づけられていました。京都大学に来る時、ASAFASを設立した立役者のお一人、南アジア地域研究の応地利明先生が「小杉先生が思うがままに、自由にイスラーム世界論を構築して下さい」とおっしゃってくださったので、「イスラーム世界論」という新分野を創るつもりで京都大学に来ました。地域研究の一環ですから、現代イスラーム世界を対象としますが、その一方でイスラーム世界のように歴史が深い地域の場合、歴史を無視して現代だけを論じるのもいけませんから、歴史と現代を架橋するというのがもう1つの眼目でした。

実は、この年に筑摩書房から、「21世紀の世界政治（全5巻）」の1冊として、『イスラーム世界』（小杉 1998a）を上梓しました。全体の企画・監修は猪口孝先生（1944-2024）で、イスラーム世界に1巻を当てたのは猪口先生です。他の4つは、アジア・太平洋世界、中国世界、日米欧世界、ロシア世界です。イスラーム世界は人口ではすでに世界の5分の1でしたから、それに1巻を当てたのは猪口先生の慧眼だと思います。この本は、京都大学に来る前に書き上げて、イスラーム世界を「イスラーム世界」という一体のものとして描くという課題に相当に注力しました。その本が出たところで「イスラーム世界論」を京都大学で構築するという課題に出会ったので、私個人としては、とてもいいめぐり合わせのように感じました。

1998年4月に赴任した時、たまたまその年の政府の新年度予算が遅れて成立したため、8日間は

東南アジア研究所の教授にいただきました。そして、いよいよスタートという時、応地先生が大型プロジェクトが採択されたと知らせてくれました。金額を聞いた時、「これで業務が倍になった」と直感しましたが、ASAFAS スタートの時に大型プロジェクトが採択され、そのおかげで日本最大のアラビア語コレクションを京都大学に創ることができました。集書を皆さまの協力を得て、5年間でやりました。京都大学のコレクションのすごいところは、本を購入したら分類して配架する仕組みを作り、全国の研究者がすぐに使えるようにしたことです。

アラビア語の出版では、ながらくエジプトとレバノンが中心で、20世紀後半には湾岸諸国の出版業も大きく発展しましたが、書物の流通ということでは、やはりカイロが一大中心地でした。今のようにネット通販はまだありませんでしたから、カイロの現地に赴き、膨大な量の書籍を買い付けたのは、よい思い出です。

ちなみに、後に、アキール先生というパキスタンの大学者の蔵書（アキール文庫と呼ばれています）を、大阪大学の山根聡先生のご紹介で京都大学に入れることができ、ウルドゥー語コレクションも、日本で最大、世界で見てもイギリスに次いで二番目、ということになりました。アキール先生が京都大学を選んでくださったのは、先生のコレクションはそれまでも有名で、カラチに世界中の研究者が訪れていたのですが、日本であれば平和で安全なので、これからも蔵書を世界に開かれた形で維持できるだろうというご判断でした。

アラビア語とウルドゥー語という、2つのイスラーム言語のコレクションを集めたことは、研究環境の整備と研究自体の発展に寄与したということで、2013年には京都大学に特に貢献した教員に与えられる京都大学孜孜賞をいただきました。もちろん、集書というのは、研究者個人ですることではなく、同僚の先生方や事務方の多くの皆さんの力を合わせて初めて可能となることから、私が賞を頂いたということはチームの代表としていただいたので、全員の功績が称えられたのだと理解しています。

なぜ、原典史資料を収集することに、ここまで注力したかということ、1つはもちろん、地域研究の基礎としての地域の原典を集める、ということですし、もう1つは、後の世代が蔵書から私たちの仕事を理解してくれるだろうという期待からです。「虎は死して皮を残す」と言いますが、原典のコレクションを私たちの遺した「皮」と理解して、頑張った結果を評価していただければ、嬉しく思います。

付言すると、それまでは東京にある東洋文庫が日本最大のアラビア語コレクションを持っていました。さきほど言いましたように、国際大学では1980年代後半にそれに次ぐ集書をしました。京都大学では、東洋文庫を抜きましたので（ペルシア語・トルコ語まで含めると東洋文庫が今でも群を抜いていますが）、私自身が関わったアラビア語コレクションは、現在の日本の第一位と第三位、ということになります。

原典主義

地域言語は地域毎に異なりますが、私が原典としてアラビア語の書物を指す場合、それはアラブ世界の現地語という意味と、イスラーム世界の共通語としての意味があります。「イスラーム世界」とは、知識人の共通語がアラビア語である領域と定義することができます。

私がアラビア語を始めたのは18歳の時ですから、英語が好きで、面白い外国語ができる大学に進学したいと思った高校生が、なぜ、アラビア語を選んだのか、今考えると不思議な気がします。ほかの人がやっていない面白そうな言語を選んだつもりでしたが、当時は、これほど奥が深く、出

版が種類も量も多い言語だとは思ってもみなかったですし、面白さが続いたのは、自分を惹きつける(古今の)著者たちに出会い続けたからで、すべては結果論かと思います。ただ、私が若い院生さんたちに「アラビア語がわかれば、隠れた財宝のような書物の世界が開ける」と語り続けてきたのは、結果論にしても、自分の実体験に基づいたアドバイスです。

自分の母語ではない言語を修得して、その言語が作っている世界を理解するには、相当な鍛錬が必要です。私はとにもかくにも、アラビア語の本をひたすら読みあさる方法を採用しました。速読・多読が得意技です。

読んでいる途中で辞書は、基本的に引きません。この単語がわかれば全体がわかりそう、というようなキータームがあれば辞書に当たることはしますが、読んでいる最中には辞書は引きません。いちいち知らない単語を調べる方式もありますが、私はそれは「辞書を引いている」ので、「本を読んでいるのではない」と思っています。本を読む、文章を読む、というのは、きれぎれに読むのではなく、続けて書かれていることを読み込むことを指しています。

「読書百遍意自ずから通ず」という言葉がありますが、私のはその方式ですね。それは元はといえば、高校生時代にプロの翻訳家の浅倉先生に教わった方式です。

高校生の頃の私は、翻訳者・紀行文学者をめざしていたのですが、浅倉先生は、英語の本を辞書を引かずに読みまくるという手法を教えてくださいました。英語の小説を毎週1冊、そのように読んでは浅倉先生と会った時に内容の話や感想を言う、ということを繰り返しました。なぜ、このような方法で語学力が向上するのか、という理屈はあるのですが、理屈はともかく、私はそれをずっと実践してきましたので、その有効性を確信しています。大学生になった1972年には、私の訳業が『SFマガジン』にも載りました(クリストファー 1972; ナイト 1972)。もっとも、アラビア語の方に転じたので、プロの翻訳家をそれ以上はめざさずに終わりました(後の翻訳は、研究者としての作業となりました)。

京大で教授として務めた後年には、院生さんに教えるために、私の学んだ読み方の応用形として「読書5巡法」を編み出しました。外国語の本や論文を読む時に、1回目は辞書を一切引かずに、2回目はキータームと思われる単語に鉛筆で○を付け、3~4回目はページ当たり5~10語重要そうな単語を調べ、最後の5回目は再び、辞書は引かずに通読する、という方法です。

浅倉先生に教わったのは、書き手の意識や論理の流れに沿って読む、という手法です。辞書を引くと、その流れが見えなくなるので、そうならないように何が書かれ、何が言われているのかを把握することに集中するわけです。アラビア語でも、時折「タネ本」(私は重要と思われる文献を研究の「タネ本」と呼んでいます)は5巡ではなく、10巡でも20巡でも徹底して読み込みますが、全体として速読・多読で読み抜くことを実践し続けました。

ASAFASが始まった時に、私がお願いして京大に来ていただいた東長靖先生は、15か国語に通じた語学の達人ですが、東長先生のような場合は文法と辞書引きを基本とする読解法だろうと思います。なので、私の読書法に最初は疑問を感じたようですが、何年かして、そういう方法について言及がある専門家の本を見つけ、私のような方法もあるのがわかった、とおっしゃっていました。考えてみれば、生まれたばかりの子どもは、ひたすら聞き、話すことで母語を獲得するわけですから、私の方法には言語学的な裏付けもあるだろうと思います。

ただ、大急ぎで付言すると、辞書を引かないというのは、あくまで「読んでいる最中には」という意味で、辞書が不要という意味ではありません。むしろ、私は辞書を集めるのが好きで、辞書自体を読むのも好きです。アラビア語の国語辞典(亜・亜辞典)を集めて読み比べ、それぞれの特徴

を解析して、自分好みの辞書を選ぶのは趣深い作業ですし、新しい辞書を入手したら拾い読みして知らない単語を覚えるのも楽しいことです。専門分野の辞事典（たとえば『岩波イスラーム辞典』のような）については、院生さんに項目を最初から終わりまで全部見て、関心のある項目は内容も読むよう勧めることもあります。初学者が辞事典から学べることは多いからです。

さて、1990 年の夏から 1 年間、英国のケンブリッジ大学に在外研究に出かけました。そこで、同じく客員研究員として滞在なさっていたユースフ・イービシュ先生（1926-2003）に出会いました。実は、1980 年前後に私が書いたものは間接的にイービシュ先生のご高説を受けていたものが多かったので、「ついにご本人に会えた」という思いでした。その後、イービシュ先生が亡くなるまで、イギリスとアメリカを往復しながら共同研究をすることになりました。

ケンブリッジでは、イスラーム政治思想を学ぶ若手が原典に触れるのがむずかしい現状を改善するために、原典のテキスト集を作ろうという話になり、私の速読・多読法が役立ちました。アラビア語原典資料集の『イスラーム政治思想の遺産』（Ibishi and Kosugi 2005）は、A4 型の大判の本に 2 段組で 1,000 頁近くテキストが詰まっています。西暦 8 世紀から 20 世紀に至る間のイスラーム政治思想家 60 人ほどについて、彼らの著作から精選したテキストが収録されています。古典期はイービシュ先生、近現代は私が主たる担当者となり、二人で最後は読み合わせをして選択をしました。

最後は 1,000 頁分のテキストに凝縮されますが、選択の過程では、それぞれの著者の作品を読んで、その肝心な部分を 20 分の 1 くらい抜き出します。言いかえると、選び出すテキストの 20 倍くらいを読まないといけなわけです。まず、テキストの原本（またはコピー）を集めるのに 3 年ほどイギリス、アメリカ、アラブ諸国の図書館と書店をまわり、2 年ほどで精選しました。著者ごと不採用の場合も、10 冊の著書のうち 1 冊しか選ばないということもあるのですが、ざくっと言って、2 万頁くらい読んだと思います。

アラビア語の本ばかり読み続けていると、自分のイメージとしては、頭の中がアラビア語でいっぱいになり、耳から単語があふれて流れ出てくるような感覚にとらわれます。イービシュ先生が、あれこれの言語を学ばずに、アラビア語に集中した方がいい、と助言してくださって以来、アラビア語、英語、日本語の本しか読まないのですが、この 3 言語でもそれぞれの言語のコスモロジーがあり、論理構造も異なっています。

アラビア語、あるいは英語で話していると、ネイティブのようにではないにしても、頭がそのコスモロジー、論理構造に切りかわっているのを、自分でも感じます。別な人格になるわけではないのですが、それでも 2~3 割は、日本語の時と比べて人格が変容する気がします。

今、論理構造と言いましたが、論理の前に、語彙の分節化が異なるのが、一番大きなポイントだろうと思います。わかりやすい例を出しますと、英語の *water* に相当するアラビア語は *mā'* で、どちらも熱くても冷たくても H_2O を意味します。ところが、日本語では、水は冷たい状態を指しますので、水とお湯は最初から別なものとして分節化されています。「お湯」を英語でなんと言うか聞かれると、日本人（日本語話者）はたいてい *hot water* と訳しますが、英語ではただの *water* であることが普通です。熱いかどうかは二次的な要素ですし、実際の会話では、見れば水なのかお湯なのかは自明ですので、「(ポットに) お湯を入れて下さい」と英語で言う場合、*water* だけで通じるわけです。

ましてや、政治や経済、社会を相手にしていると、分節化が非常に異なるケースが出てきます。地域研究では、そのような分節化の違いによって生じる認識や社会的行為の違いをきちんと見る必

要があります。研究会でも発表者が用いている用語が、現地で使われている「実体概念」なのか、私たちが外から理解のために用いている「分析概念」なのか、問われることがよくありますが、どちらを使うにしても、分節化の違いをきちんと把握して使う必要があるだろうと思います。

人間はどの社会でも自然言語を用いて生きていますので、その地域の言語が語彙や概念の分節化や論理構造について固有のあり方をしていることを念頭に置いて、語り手の言葉を理解しないと、地域研究者としてはもの足りないことになります。

私自身が現地で見つけて意義深いと思った例をあげると、「ズルム（不義）」という概念と認識の発見があります。政治思想では、「アドル（正義）」や「アダーラ（公正）」が問題とされますが、何がアドルで、アダーラかということは、抽象論はともかく、一般の人びとだけではなく政治家でも具体的に述べるのは大変です。ところが、エジプトの人びとは「ズルム」という不正、不義、圧政などを指す言葉をよく使います。自分がズルムを受けているということは、たとえば真面目に働いているのに生活が苦しくてたまらない、ところがお金持ちが悠々と高級車を乗り回しているのは目に入る、これはどこかにズルムがあるに違いない、あるいは自分はズルムを受けているのだ（マズルーム）ということは、個人の実感と言えます。アドルという公共善については語れなくても、自分の立場がズルムを受けているに違いないという実感は語れるわけです。それを観察する中で、アドルの概念は、その内容を語れなくても、反対概念としてのズルムを照らし出す働きをすることが看取されました。そして、アドルとズルムが対立概念として堅固に確立している言語に立脚しているイスラーム的な思想構造を理解することができます。

実際に、イランでの革命は「ムスタザフィン（被抑圧者たち）」の革命として提示されていました。アラビア語の「ムスタダフィーン」のペルシア語形です。レバノンでのイスラーム復興によってシーア派の間で1960年代に生まれた運動は、同じように「マフルーミン（権利を否定された者たち）の運動」と名乗りました。

話が少し変わりますが、私たちが地域研究と呼んでいる分野は、昔は地理学や外国語学の対象でした。外国語学部は、単に語学を教えるのではなく、その言葉が話されている社会について探求する場であったわけです。そのような文脈の中で、対象とする社会を「言語共同体」と表現する場合もあったと思います。その言語が形作っているコスモロジーを共有する人びとがいる、ということですね。

もちろん、地域は人だけでできあがっているわけではなく、自然環境や生態系、他の生物、それらに依存する人間の生業などがあり、それと合わせて、特定の言語を母語とする人間社会があるわけで、総合的地域研究の方法論では、その全体を把握する必要があります。そのことを前提として言えば、原典研究、フィールドワークをする場合、地域の人びとの発話や書かれたテキストがどのような生態系や社会の中で運用され、その言語がどのようなコスモロジーを内包する媒体となっているのかを、みきわめていかなければなりません。

持続型生存基盤論プロジェクト

京都大学でも、大型プロジェクトをたくさん実施しました。ASAFASは設立されたばかりでしたが、東南アジア、サハラ以南アフリカの研究には蓄積がありました。そこで、東南アジア研究所（1963～2004年までは東南アジア研究センター、2017年には東南アジア地域研究研究所に改組）とASAFASが連携して、いくつもの大型プロジェクトを実施しました。最初の文部省特別推進研究・中核的研究拠点（COE）形成プログラム「アジア・アフリカにおける地域編成：原型・変容・転

成」(1998年4月～2003年3月)では、西アジア・南アジアの集書に注力し、アラビア語蔵書数が日本第1位になりました。

続く21世紀COE「世界を先導する総合的地域研究拠点の形成(フィールド・ステーションを活用した教育・研究体制の推進)」(2002年4月～2007年3月)では、フィールド・ステーション(臨地研究のための拠点)をアジア・アフリカの各地に設置しました。私は副事務局長、研究成果等推進部会長を務めました。

大型プロジェクトの中でも特に意義深かったのは、グローバルCOEプログラム「生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点」(2007年7月～2012年3月)でした。私は人材育成センター長を務めて若手育成を推進したのですが、それ以上に、このプロジェクトによって、グローバル地域研究専攻という新しい専攻を立ち上げることができたことに大きな意味がありました。南アジア、西アジアの研究が独立した専攻となったわけです。さらに、持続型生存基盤論講座を新設して、私はイスラーム世界講座からそちらに移って、地域研究の新領域としてこれを推進しました。イスラーム経済や難民問題の研究がその中核となりました。

分析概念の造語

地域研究の愉しさの1つは、対象とする社会やそこで生起する事象を描くために、地域言語が持つ固有の概念を活用して、新しい用語を作ることだと思います。それは愉しみであると同時に、研究成果を発信する上でのむずかしい部分かもしれません。造語は、どれでも的確かつ正しいとは限りませんので。

幕末から現代に至る日本の知的風景を見れば、世界やその諸地域、諸国のことを知るたびに、新語を導入して現代日本語の語彙を増やし、操作できる概念を拡張してきたわけですから、地域研究者もそのようなコミュニティの一部として新語、造語を増やす役割があります。私自身は、そのことを強く意識して、研究を続けてきました。

ただ、イスラームの中の諸概念は、日本の既成の語彙では表現できないと言って、アラビア語の用語をそのままカタカナで導入することには、私は抑制的です。というのも、カタカナ語が多に多いと、日本の読者にとって理解しにくい文章となり、結果として理解を妨げるからです。コンピュータ関係の説明書が典型だと思いますが、現代日本語は、英語からの借用語のカタカナも非常に増えて、一般読者をよく困惑させています。同じ轍を踏まないようにしなくてはなりません。

私が半世紀の間に日本語に持ち込んだ用語を、紹介いたします。

- (1) イスラーム的共同体論：「ウンマ」と「ミッラ」
- (2) 血縁・地縁・社縁とは交差するが、中東独自の宗教観を示す「ミッラ縁」
- (3) 複合国家としてイスラーム王朝と主権ミッラ
- (4) 国民国家における「宗派(ターイファ)」の囲い込みと利権集団化
- (5) 国民国家を超える世界共同体としての「ウンマ」
- (6) 「ウンマ」を前提とするイスラーム国際関係論、「ウンマ内政」(近代国家における内政と外交の中間に位置する)
- (7) (神の)主権と(人間の)主権行使権、主権行使権の二重構造化
- (8) 西洋の社会契約説に対応するイスラームの「神の主権」
- (9) イスラームにおける政教一元論(≠政教一致)

- (10) 西洋とイスラームの理念型を区分けするための「水平分化」(西洋型)と「垂直分化」(イスラーム型)
- (11) 西洋的な政教一致・政教分離の基盤としての「政教二元論」
- (12) 政教一元論において生じる分節化の結果としての「法政二元論」(イスラーム法と国家の垂直的な二元性)、この二元論において「政教一致」に相応する「法政一致論」、「政教分離」に相応する「法政分離論」
- (13) イスラーム国家は神権政ではなく、イスラームの文化的ヘゲモニー
- (14) 「法学者の統治」論とその3類型:「法学者元首制」論、「法学者の監督」論、「法学者の政治指導」論
- (15) 思想の市場メカニズム、市場の寡占化、近現代における世界市場との連動
- (16) 法の属人主義(≠属地主義)
- (17) 関係論の人間観と「アードムの子どもたち」としての人類
- (18) イスラーム覚醒、イスラーム復興運動、イスラーム復興の日常化
- (19) イスラーム復興と伝統の再活性化
- (20) (イスラーム復興理論における)再解釈派、再構築派
- (21) イスラーム復興の内実としての「ウンマ復興」
- (22) 動的プロセスとしてのイスラーム化、脱イスラーム化、再イスラーム化
- (23) 3つのベクトル論:西洋的近代化、ナショナリズム、イスラーム復興
- (24) イスラーム中道派(⇔イスラーム急進派、イスラーム過激派)
- (25) イスラーム法学ルネサンス(+法学ルネサンスの第2段階、第3段階)
- (26) イスラーム法解釈の革新、イスラーム法源学の復興
- (27) イスラーム市民社会、市民社会の法としてのシャリーア
- (28) 政党の類型としての「イスラーム政党」
- (29) イスラーム世界の消滅と再生、再生したものとしての「現代イスラーム世界」、国際関係における実体としてのイスラーム世界
- (30) 政治思想における伝統的遺産の動員
- (31) アラブ・シーア派
- (32) 現代におけるシーア派の思想的ヘゲモニー(シーア派が広域的にヘゲモニーを持つ稀有な時代としての現代)
- (33) イスラーム諸学派接近論(和合論)
- (34) アイデンティティの重層構造化に対応する「n祖国」ナショナリズム
- (35) 帝国なきあとのジハード
- (36) 普遍言語としてのアラビア語、民族言語としてのアラビア語
- (37) 宗教と社会の統合(政治と宗教ではなく)
- (38) 教経統合論(宗教と経済が結び合わさる仕組み)とイスラーム経済
- (39) イスラーム文明における文理融合論(宗教と科学の相補的關係)
- (40) 社会運営の技術体系
- (41) イスラーム文明における農耕・都市・遊牧文化の3項連関
- (42) 文明の重心点
- (43) ハラル人生哲学

- (44) アブラハム的一神教の故地
- (45) 系譜的ネットワークと「部族」
- (46) メタ地域、メタ地域としてのダール

「政教一元論」をめぐる論争

こうしてみると、われながら、たくさんの造語をしたものだと思います。この中でも、特にインパクトがあったのは、「政教一元論」ではないでしょうか。

その背景は、私の造語が強い訴求力を持ったというだけではなく、イラン・イスラーム革命などによって、1970年代末以降に、この現代において「神の革命」「神権政治」みたいなものが復活するのか、という驚きが国際的に広がったという社会的な現実があります。多くの人が革命後のイランを「政教一致」と思ったのに対して、私はそうではなくて、「政教一元」と考えるべきという説明をしたわけですが、説明以前に実際に起きた現象が大きな謎を生んでいて、説明原理が求められていました。

「政教一致」は「政教分離」とセットの言葉で、一致も分離も「政教二元論」がベースだというのが私の主張でした。なぜ、そのようなことが起きるかと言えば、西欧ではローマ帝国（＝政、国家）が存在しているところにキリスト教（＝教）が浸透して、国家と教会の関係が生じたからです。法的に言っても市民法（ローマ法）と教会法が二元的になっていました。ところが、イスラームは預言者ムハンマド時代のマディーナで、共同体、法、国家が一体のものとして誕生したため、「神のものは神に、カエサルのはカエサルに」という西欧的な二元論になりませんでした。これを私は「政治と宗教を分けて認識しない」、つまり「政教一元論」と呼んだのですが、それにしても西欧的な「政教一致」「政教分離」の「政教」という二元論的な言い方を引きずったままに、一元論だと言わざるをえない限界を抱えています。しかも、世界中の社会科学が西洋近代的な発想を前提にしているのに対して、イスラームと比べると、西欧は政教二元論である、という主張をするのですから、そう簡単に大方の賛同を得るわけにはいきません。

2022年に出版された『論点・東洋史学』（吉澤ほか 2022）という本があります。これを見ますと、政教一元論が非常に強く批判されています。「アジア・アフリカへの問い 158」という副題が付いていますが、その1つとして、政教一元論が取り上げられています（「29 政教一元論」）。マムルーク朝などを研究なさっている中町信孝さんが書いているのですが、大変光栄なことだと思って読みました。私は歴史学者ではありませんので、ちょっと面はゆいですが、東洋史の側から批判の対象にすべきだと思うほど重視していただくのは、ありがたいことです。政教一元論の議論は、そこまでインパクトを持ったのだと、あらためて感じました。

ただ、中町さんの項目の副題は「イスラームは政教一致の宗教か」とありますので、今一つ、きちんと理解されていないのだとも感じました。私は、イスラームは政教一致ではない、と力説して、政教一元論的な認識枠組のもとに展開している、ということを主張し続けてきたわけですから。

私自身は、政教関係だけではなく、上にあげた造語の(34)～(36)にあるように、宗教と社会の統合や、教経統合論、文理融合論をも論じてきました。「文理融合論」は現代風の言い方ですが、前近代のイスラーム文明では、法学者や神学者と、自然科学の科学者は分野の棲み分けをしていて、互いの領域を侵さなかった、つまり、宗教と科学が対立していなかった、ということの分析枠組を論じたものです。西欧のように、教会が天動説を固持し、地動説を唱える天文学者と対立するような構造はイスラーム世界にはありませんでした。

それゆえ、「イスラーム科学」、つまりイスラーム文明の科学部門というような考え方が成り立ちます。科学の営為を世俗的とするならば、宗教と世俗が一体的というよりも、世俗のことをもイスラームの中に含めて考えるのだとも言えます。政教一致と言うと宗教がすべてを包摂しようとするイメージになりますが、宗教と世俗のどちらもイスラームの教えによると主張するのがイスラーム的なものの見方、と考えるとわかりやすい気がします。イスラームと称していることの内容を見ると、実は、世俗的な事項が非常に多いのです。たとえば、イスラーム法には家屋の貸借関係の規定もあります。これなどただの経済的な規定で、宗教性は何もありませんが、典拠がクルアーンやスンナ（預言者慣行）にあるという意味でイスラームだと言われます。

上にあげたような概念をいろいろと提案するのは、イスラーム政治思想という分野が世界的にも研究者が少なく、分析枠組が確立されていないからです。私は日本比較政治学会も、設立発起人として参加してきましたが、比較政治学的な手法で、比較を可能ならしめるような補助線を引くことが必要です。

未開拓の分野を研究する場合に、全体的な枠組が確立していないのに、個別の事例研究をどのようにして位置付けできるかという問題が生じます。それと同時に、事例研究が積み重なっていないのに、いかに全体像を描き、全体を区分けする枠組が作れるのか、という問題が生じます。いわゆる「卵とニワトリ」の関係ですね。

私自身は、卵とニワトリを同時に描くという、無理くりの手法をとりました。つまり、多くの事例に目配りしながら全体的な枠組を構築すると同時に、それを前提として個別の事例研究をおこなう、という二面作戦です。それには、膨大な原典の読み込みが役立ちました。イービシュ先生と作った『イスラーム政治思想の遺産』(İbîsh and Kosugi 2005)というテキスト集も、まさに12世紀間の思想の展開を全体としての布置図に落とし込みつつ、個別のテキストを配置するという作業でした。

なお、ここでの「イスラーム政治思想」は広義のもので、近現代に入ると、アラブ民族主義も含まれています。イスラームと対抗する世俗主義までは拡張できないにしても、「アラブ・ウンマ」を称揚するナショナリズムは、明らかにイスラームのウンマ思想を換骨奪胎しています。

「イスラーム世界」の消滅と再生

私は思想史の専門家ですから、歴史学ではないと言いつつも、思想の展開は歴史の現実と強い関連性があります。それと、イスラーム復興の現実とそれをめぐる私たちの議論は、「イスラームの規範性」の強さ、言いかえると思想が社会に対して持つ影響力というものを前提としています。昔、「思想研究とは、誰も知らない思想家を見つけ出し、誰も知らないその人の思想を研究することだ」という、少しシニカルな言い方をどこかで聞いたことがありますが、私は社会的に意義を持っている思想と思想家を中心に研究すべきだという立場です。「思想を、社会の動態の中で解析する」と言っているのは、そのことを指しています。重要な思想家が、その影響力が認知されていないから「誰も知らない思想家」になっている場合もありますが、地域研究をしている以上、日本や欧米では知られていなくても、現地では大きな役割を果たしている人を対象とするのがよいと思います。

イスラーム世界という言葉は一般語で、私が提案した用語ではありませんが、歴史的なイスラーム世界、言いかえるとイスラーム諸王朝が構成していたイスラーム世界は20世紀の両大戦間期にいったん消滅し、1969年のイスラーム首脳会議と、そこで結成が決まったイスラーム諸国会議機

構（OIC、2011年にイスラーム協力機構と改名）をもって、国連に加盟している主権国家の連合体として現代イスラーム世界が再登場した、という枠組は、私が提案しました。そのことを実証するための研究として、イスラーム復興運動の創成期（19世紀後半のアフガーニー、アブドゥッフの活動）からマナール派（ラシード・リダーが創刊し主筆を務めた『マナール』誌を媒体とするネットワーク）の活動、さらにリダーの盟友（カワーキビー、シャキープ・アルスラーン）や弟子たち（アミーン・フサイニーなど）が深い関わりを持った国際的な「イスラーム会議」の理念や実際の会議の開催について、探究しました。

『マナール』誌については、1898年から1935年の間にイスラーム世界の情報を広く掲載した重要なリソースとして、自分の研究論文をいくつも書くだけではなく、主題索引（Kosugi, Ibish and Khūrī 1998）、CD-ROM版の復刻（小杉 2003）を含めて、『マナール』誌を世界中の研究者に使ってもらえるようにしました。『マナール』誌は「（西は）モロッコから（東は）ジャワまで」広く流通し、ウンマ＝イスラーム世界というものをムスリム当人たちに実在のものと感じさせるメディアとして大きな役割を果たしました。

そのような研究・出版活動の過程で、世界共同体としてのウンマの概念が、現代的な文脈で再定義され、広められたこともはっきりとしてきました。イスラーム諸国の連帯や、イスラーム協力機構という国際機構そのものの基盤に、このウンマがあることは、今では広く知られています。

1998年のASAFAS設立時の連環地域論講座、さらに2009年にそこから発展したグローバル地域研究専攻では、「イスラーム世界論」を1つの研究領域としてきましたので、現代のイスラーム世界を論じることは私自身の研究テーマの追究のみならず、京都大学における研究領域としてのイスラーム世界を定義づけし、明確な輪郭を持たせることにも寄与するものでした。

その際に忘れてはならない1つの要素は、アラブ中心主義を排することだったように思います。さきほど、新プロ方式による「イスラーム地域研究」について、アラブ以外の諸地域も広く対象としたと申し上げましたが、イスラーム世界を論じる以上は、イスラーム世界を構成している諸地域がそれぞれに固有の価値を持っているという前提が必要です。アラブが本場で、東南アジアなどのイスラームは悪く言えば田舎のイスラームというようなイメージが、かつてありました。それはそうではない、ということ、私のようなアラブの専門家が言うことに意義があると思って、この広域主義を強く押し進めました。

イスラーム世界の諸地域は、イスラームが誕生したアラビア半島を除くと、すべて歴史の中でイスラーム化した地域です。そのように定義して、イスラーム世界とはイスラーム化した諸地域の複合体であると考え、イスラーム化とは何かを論じました。すなわち1つの地域がイスラームに染まっていくということはどのようなことなのか、それを考えると、当該地域がイスラーム化すると同時に、イスラームもその地域で現地文化と干渉しあい、融合して「現地化」することがわかります。しかも、イスラームは生誕の地から毎度再輸出されるのではなく、イスラーム化と現地化が融合したものが次の地域に広がっていくのですから、イスラーム化・現地化は非常に動的なプロセスにはかなりませぬ。

そのような視点で見ると、アラブ地域のイスラームが本場で、たとえばインドネシアは場末だというような見方は誤りであることが、はっきりします。ところが、日本のインドネシア研究者にそれを言うと、「インドネシア人自身が、アラブが本場だと言っている」と反論されました。それはインドネシア人が持っているアラブ中心主義を示しますが、研究者から見て客観的な事実とは言えません。アラビア語の聖典クルアーンがアラビア半島でアラブ人の預言者ムハンマドに下されたこ

とが、イスラームの基本であり、ムスリムが毎日朗誦するクルアーンがそのイメージを再生し続けているとしても、現在のアラブ諸国がイスラームを本源的な形で実践していると思うのは、妥当ではありません。アラブ諸国においてさえも、繰り返しイスラーム化と現地化が生じて、現在に至っているという認識が必要です。

さらに言えば、イスラーム法学で、ムスリム総人口のうち第二位のシェアを持つシャーフィイー法学派はアラブ圏にもいますが、信徒の大半はインドネシア、マレーシア、ブルネイなど、東南アジアに住んでいます。アラブ圏では、シャーフィイー法学派の学統はしっかり続いているものの、社会的な実践としては、圧倒的に東南アジアの法学派なのです。ですから、社会的実態としてシャーフィイー法学派を研究するのであれば、東南アジアの事例が基本となるべきです。

もう1つ重要なことは、イスラームは西暦7世紀のアラビア半島で誕生し、後に基本的な典拠となる聖典クルアーンもハディース（預言者言行録）も、そこに起源がありますが、啓典解釈学、ハディース学、法学、法源学、神学、倫理学といった知の体系化がおこなわれ、今日に続くイスラームの姿が明確となるには、3世紀ほどかかりました。それをしっかりと把握しないと、現代だけを相手に、そこでのイスラームを超歴史的なものとして誤認することになりかねません。そこから、初期イスラームを明らかにする研究にも、取り組みました。

初期イスラームの3部作（または5部作）

私自身が「3部作」と呼んでいるのは、イスラームの開祖を描いた『ムハンマド：イスラームの源流をたずねて』（小杉 2002）、聖典クルアーンとは何かを描いた『「クルアーン」：語りかけるイスラーム』（小杉 2009）、ムハンマドの言行録を編纂して、どのようなものかを1冊の本で読者が理解できるように努めた『ムハンマドのことは：ハディース』（小杉 2019）です。

これらを3部作として選んだのは、クルアーン、ムハンマドの言行であるハディース集、ムスリムにとっての人生モデルとしてのムハンマドが、現代においても非常に強い影響力を持っているからです。この3つを理解せずに、現代のムスリム社会を理解することはできないと思います。

さらに初期イスラームを描いたものとして、歴史としての初期イスラーム（預言者時代からアッバース朝初期まで）を描いた『イスラーム帝国のジハード』（小杉 2006）、法学派や神学派の発展や、宗教者と科学者の棲み分け構造などを描いた『イスラーム 文明と国家の形成』（小杉 2011）があります。前者は宗教・政治史で、イスラーム世界が確立する時期を描いており、後者は文明史・学術史で、知の体系化を通じて、イスラームが私たちの知っている（そしてイスラーム世界でムスリムたちが認識している）イスラームとなる過程とメカニズムを描いています。この2冊を足して、小杉の初期イスラーム5部作としたいと思います。

さいわいなことに、『イスラーム帝国のジハード』は2016年に文庫版になった後、電子書籍にもなり、『ムハンマドのことは：ハディース』も電子化されて、両方とも読者にとって便利に使えるようになっています。

ちなみに、さきほど申し上げた「枠組」と個別の「事例研究」のことで言うと、1994年に刊行した『イスラームとは何か：その宗教・社会・文化』（小杉 1994b）は、今にして思うとイスラームの全体像を描く私の「枠組」を表明した作品だったと思います。イスラーム初期5部作は、その枠組を前提とする事例研究なり個別の詳論と言える面を持っています。

なお、『イスラームとは何か』は非常にわかりやすいという評判で、全国の大学でイスラーム関係の入門的な科目を教えている先生方に参考図書に指定いただいたせいもあってか、30年の間に

40 刷もののロングセラーとなりました。

イスラーム経済研究のインキュベーター

ここで、宗教・政治から離れて、イスラーム経済について少しお話しします。私がイスラーム経済の研究にも手を染めたのには、3つ理由があります。1つ目は、イスラーム原理主義の議論が盛んになるにつれてイスラーム脅威論が強まったり、2001年の9.11事件（米国での同時多発テロ事件）以降に「イスラームはテロと関係がある？」という疑問が強まったりしましたが、イスラーム復興運動の中でも無利子銀行やイスラーム経済は脅威論に結びつかないからです。政治を論じていると、私の場合は特に革命・戦争・内戦に関わりが深いので、どうしても脅威論を意識する必要がありますが、経済はそうではありません。

2つ目は、イスラーム的な政治概念を明らかにする際に、経済と比較するといっそうわかりやすくなるからです。たとえば、「神の主権」という概念は、クルアーンの章句がそう理解できる内容を述べていることを踏まえて、政治思想の著作の中からそれに対応する主張を抜き出してきて論じるわけですが、目に見えない神が主権を有しているという話は、どうしても抽象的な、あるいは理念的な議論に聞こえてしまいます。ところが、世界を創造した神がいるとすれば、その神は被造物のすべての所有者であるに違いない、ということは自明のことに聞こえます。万物に対する神の所有権ということですが、複雑な議論をする必要はありません。そして、その神の創ったものを人間は使うことができるということも、わかりやすい話です。他方で、使うには条件があり、それは所有財産の一部を貧者のための喜捨として差し出すことだ、というのも、宗教倫理として自然だろうと思います。その話を踏まえて、政治面でも同じように神の主権があって、人間にはそれを使う主権行使権があるのです、と言うと、政治だけで論じるよりもわかりやすくなります。

3つ目は、私がエジプトに留学していた頃から研究者としての仕事を始めた頃が、まさにイスラーム銀行の勃興期で、現地で見えて、地域固有の経済活動として無視し得ない勢いを持っていたことです。1960年代から1970年代前半までのエジプトは、アラブ社会主義同盟という一党独裁の政党があり、本部をナイル川に面した都心の一等地に構えていました。ところが、ナセル時代に作られたこの組織を、1970年にナセル没後を継いだサダト大統領が解体し、民主化と複数政党化を進めました。1978年にアラブ社会主義同盟が解体されると、その本部ビルは1977年に設立されたばかりのイスラーム銀行（エジプト・ファイサル・イスラーム銀行）の本社となりました。ナイル川のほとりで私はそれを見て、アラブ社会主義からイスラーム銀行へという、新しい時代の流れを感じました。

もう1つ、契機となったのは、1984年に国際大学に赴任した時に、そこでイラクのイスラーム法学者サドル（ムハンマド・パーキル）のイスラーム経済関係の著作の翻訳作業がなされていて、私も『イスラーム経済論』（サドル 1993）の下訳を通じて、その作業に加わったことでした。

ただし、国際大学時代はイスラーム政治の研究に集中しましたので、1980年代にはサドルの「法学者の監督」論や、イスラーム政府論の解析に取り組みました。イランのイスラーム共和国は、ホメイニ師という高位法学者が革命の指導者として姿を現し、革命の成就後は国家の最高指導者となりました。彼の「法学者の監督」論は、「法学者の統治」論のタイプの1つで、しかも実際に国家権力を奪取してそれを実践しましたので、非常に重要ですが、イラン・イスラーム共和国憲法に織り込まれているイスラーム政府は、サドルが1979年にレバノンの法学者たちの質問に答えて明らかにした原理を大幅に取り入れたものでした。

サドルは、イラクのナジャフに拠点を置く法学者で、同じくナジャフで学んだレバノンのファドルラーはその盟友でした。ファドルラーはレバノン内戦(1975-1990)の最初の「2年戦争」(1975-1976)の時期に『イスラームと力の論理』を著しました。同書は、弱者は実は多数派なので、自覚さえ持てば大きな力を行使できる、という「弱者の武器」を理論化したもので、彼は後に登場するイスラーム組織のヒズブラーの思想的な創始者となりました。

サドルとファドルラーの著作からエッセンスを抜粋して編訳した『イスラームの革命と国家：現代アラブ・シーア派の政治思想』(小杉 1992)は、「アラブ・シーア派」という概念を提起するものとなりました。それ以前は、シーア派といえばイランというイメージが強かったのですが、そもそものシーア派は起源からしてもアラブ色が濃く、革命後のイランはアラブ圏のイラクやサウディアラビア、クウェートのシーア派とも連携し、シーア派系のアラビア語出版を強力に推し進めていましたから、「アラブ・シーア派」に着目することには大きな意味がありました。

さて、本格的にイスラーム経済の研究に向かったのは、京都大学に移ってからです。とはいえ、私自身が研究を進めるというよりは、大学院教育を通じた、いわばインキュベーター(起業支援システム)の役割が大きかったと思います。2001年に「教経統合論」を唱えたのも、その一環でした。京都大学が日本のイスラーム経済研究の拠点となったのは、長岡慎介先生が博論をベースにした『現代イスラーム金融論』(長岡 2011)でイスラーム経済の基本的な枠組と固有の概念を明らかにしてからです。私も、長岡先生と入門的な『イスラーム銀行：金融と国際経済』(小杉・長岡 2010)を共著で上梓しました。

インキュベーターという言葉を使いましたが、大学院教育というのは、そのものが学知(学術的な体系を背景とした知識)における起業家(自立する研究者)のインキュベーターという面を持っています。政治研究では、中東地域研究で最初に学位を取った末近浩太先生が博論をベースとした『現代シリアの国家変容とイスラーム』(末近 2005)を刊行して以降、続々と後進が輩出しました。

重点領域としての「イスラーム地域研究」

イスラーム経済研究を推進する上で大きな手助けとなったのは、2006年に始まった人間文化研究機構(NIHU)による「イスラーム地域研究」プログラムでした。これは、日本における地域研究の中で、研究が不足し、今後の強化が必要とされる地域を「重点領域」に指定して、発展を期するというプログラムで、イスラーム地域研究と並んで当初は、南アジアが重点領域に指定されました。

さきほど触れた「イスラーム地域研究」が略称に過ぎなかったのに対して、今回は正式名称となりました。全体の研究代表は、今回も佐藤次高先生でした。1997年のイスラーム地域研究が「新プロ方式」、つまり、1つの大きなプロジェクトとして企画されており、下位単位として班が設置されているものの研究チームは全体で1つである、という形をしていました。それに対して、NIHUと各大学が契約を結ぶ今回の重点領域では、各大学の拠点は独立しており、それらは連携しているが本部(早稲田大学)の下位に各大学があるわけではない、という説明がなされました。

私は京都大学拠点の代表として、他の大学の皆さんと私的な会話のなかで、前は一体の「マムルーク軍団」でしたが、今回はマムルーク船団で、それぞれの船(拠点)は独立しているが、チームを組んで航行している、という比喻を使って話し合っていました。半ば冗談のような比喻ですが、佐藤先生は軍人奴隷の王朝であるマムルーク朝を研究なさっていましたので、全体のリーダー

をマムルークのスルタン（君主）になぞらえ、参加している研究者をマムルーク将校になぞらえたものです。

マムルークは軍人奴隷で、頭角を現した軍人が解放されて、やがてスルタンにまで上り詰めるという能力主義の王朝がマムルーク朝でした。ふつう前近代の王朝は血統による世襲ですが、エジプトを拠点としたマムルーク朝（1250-1517）は実力主義による権力継承で、それゆえに長持ちしたとされています。現代の研究プロジェクトをマムルーク軍人の男性たちに例えるのは、ジェンダーフリーの時代にはふさわしくない比喻だと思いますが、2つの「イスラーム地域研究」のプロジェクトの性質の違いを理解する上では、陸の軍団と海の船団という対比は有用だったと思います。

京都大学ではこれにともない、ASAFASの附属センターとして、イスラーム地域研究センター（KIAS）が設置されました。略称は、プロジェクトの略称がIASでしたので、その前に各大学のイニシャル1文字を付けて区分けしようという趣旨で、京都大学のKを付けてKIAS（カイアスと読みます）としました。

イスラーム地域研究が2期にわたって実施された後、2015年からは重点領域の対象が「中東地域研究」と変わって、もう1期実施されました。KIASという組織名は変更なく、今日に至っています。2022年には、NIHUプログラムは終了し、ASAFAS独自の組織としてKIASは継続しています。

このイスラーム地域研究の成果の1つは、「原典主義」を体現するものとして、「原典叢書」を岩波書店から刊行したことだったと思います。『預言者ムハンマド伝』（イブン・イスハーク 2010-2012）、『諸国征服史』（バラーズリー 2012-2014）のような古典から、現代の『ムスリム同胞団の思想』（バンナー 2015-2016）まで、アラビア語、ペルシア語、オスマン語、中国語などの原典の優れた和訳を読者に届けることができました。

私自身は、ASAFASの研究科長となった2014年にKIASのセンター長を東長先生と交代し、その後は「第2班」、つまり政治に関わる班への参画を続けてきました。プロジェクトの内容は期によって変化しますが、KIASの構成は、スピリチュアリティやスーフイズム、文化を主対象とする第1班、政治や国際関係が主対象の第2班、イスラーム経済を対象とする第3班という編成を続けています。

なお、附属センターとしては、2015年にハダーリー・イスラーム文明研究センターを設置し、センター長を2019年の定年まで務めました。このセンターは、マレーシア国民大学のイスラーム文明研究所との連携で、アブドッラ・バダウィ第5代マレーシア首相（在職2003-2009）の後援を受けて設置されました。「イスラーム文明研究ハダーリー賞」を設けて、優れた研究活動や個々人の著作を顕彰してきたのは、学術に対する貢献の1つと言えます。

「知のインフラ」作り

あらためて、研究者をめざす要素が自分自身に生まれたのはいつか、と考えると、それは梅棹忠夫先生の『知的生産の技術』（梅棹 1969）が岩波新書で出された時であったと思います。高校生だった私は感銘を受けて、大学に入るとすぐにこの本のアドバイスを従い、「京大式カード」を印刷屋さんで1万枚刷ってもらい、読書記録、日記、アイデア・メモなど、ありとあらゆることをカードに書く生活を始めました。私が大学に入った時は、1970年前後のいわゆる「大学紛争」（学生の側から言えば大学のあり方への「異議申し立て」の運動）が沈静化したばかりの頃で、私が通っていた横浜の高校でも「紛争」があり、大学の「学問」には深刻な疑問符が付いていました。

だからこそ、学問ではなく「知的生産」であり、生産である以上は「技術」があるという梅棹先生の主張には、心から納得しました。

大学の教師となってから、院生の皆さんにことある毎に、「研究とは勉強のことではない。勉強は今の情報化時代、生涯学習の時代には誰もがし続ける当たり前のことで、研究者は成果を発信するから研究者と言えるのだ」と説いてきましたが、それはこの『知的生産の技術』以来の確信なのです。

梅棹先生のご高説の中で、ただ1つ疑問を感じたのは、漢字を排して、ひらがなタイプライターでもを書くようにすべきという勧めでした。梅棹先生は晩年まで、この説をまげなかったようですが、1980年代にワープロが普及して、漢字かな混じり文のままでタイプライターが使えるようになりました。それはちょうど私がエジプトから帰国した頃でしたから、私は喜び勇んでワープロの使い方を覚えました。アップルが卓上パソコンとしてマッキントッシュを出したのも、同じ頃です。

日本中東学会が1984年に設立されると、事務局長だった板垣先生が投稿者は全員、論文をワープロで作成するようにという、革命的な方針をお出しになりました。今から思えば、時代の先をゆく卓見でしたが、多くの会員が驚きを隠せなかったと思います。この方式は学会誌の印刷費用の軽減という目的を持っており、そのおかげで、その後の学会の財政が安定したことも否めません。

最初に、私の研究の原点の1つが、梅棹忠夫先生の『知的生産の技術』だったと申し上げました。研究が「知的生産」であるとする、その技術の中にはデジタル化も含まれますが、生産活動にはインフラが欠かせないので、「知のインフラ」作りという課題も生まれます。ここでいうインフラは、科学者コミュニティが用いる公共財という意味で、文系の研究者の誰が必要とする辞典・事典やデータベースを初めとする種々のツールのことです。ただ、研究者は自分の論文を生産して身を立てるので、皆の役に立つ（しかし業績としては評価が低い）インフラ作りには、あまり関心を示しません。その傾向には、私はずっと反対してきました。そして、インフラ作りへの参加を推奨すると同時に、インフラ作りのへの貢献を学術的貢献としてもっと評価すべきと主張してきました。

京都大学での同僚の東長先生も「知のインフラ」整備を重視していましたので、これは京大でのイスラーム世界論の基調となりました。先駆的なインフラ整備として、板垣先生がかつて編集なさった『中東ハンドブック』（板垣 1978）・『新・中東ハンドブック』（板垣 1992）や、同じく板垣先生が音頭を取ってお作りになった「講座イスラーム世界」の別巻として出された『イスラーム研究ハンドブック』（三浦・東長・黒木 1995）があります。このハンドブックを先例としながら、さらにパワーアップしたのが、私が東長先生、林佳世子先生をお誘いして編集した『イスラーム世界研究マニュアル』（小杉・林・東長 2008）でした。

それに先立って、2002年には『岩波イスラーム辞典』を上梓しました。私は6人の編集委員の1人でしたが、内幕を言えば、山内昌之先生、大塚和夫先生と3人で語って、一番最初の構想から関わりました。この規模の専門辞書を作成するのは、大変な労力がかかることですが、さいわい、小松久男先生、羽田正先生、東長先生にも編集委員会に加わっていただき、多くの編集協力者と執筆者の力添えで、学界のスタンダードとなる辞典ができあがりました。

辞典の編纂は何年もかかることなので、この辞典が9.11事件のすぐ後に刊行されたのは偶然の所産なのですが、その偶然が幸いして、毎日出版文化賞を受賞することもできました。

辞書作りという点では、私の最初の仕事は『現代イスラム小事典』（片倉ほか 1987）で、これ

は当時民博にいらした片倉もとこ先生 (1937-2013) がリーダーとなって、石油会社のエッソが刊行したものです。これが元種となって、後に、片倉先生たちの『イスラーム世界事典』(片倉ほか 2002) に発展しました。

岩波イスラーム辞典の後では、同じく岩波書店から刊行された『岩波世界人名大辞典』(岩波書店辞典編集部 2013) で、西アジアやイスラームに関わる約 2,000 人の項目を監修しました。日本を代表する国語辞典である『広辞苑』も、イスラームや中東に関わる項目の執筆・校閲者として、第 5 版から第 7 版まで関わりました。米国で出された思想に関する百科事典の和訳として、『スクリプナー思想史大事典』(スクリプナー思想史大事典翻訳編集委員会 2016) でも翻訳編集委員を務めました。10 巻本で、担当した項目数も膨大でしたので、実際の翻訳担当者との連絡を含めて、ずいぶんとエネルギーを費やしたものです。

ちなみに、イスラーム辞典のような専門辞典は、学界の動向を反映しつつ読者に「こう理解すべきだ」と主張することができますが、『広辞苑』のような国語辞典はあくまで、社会がその語をどのように使っているかに基づいて記述するので、そこには大きな性質の違いがあります。辞書というスタンダードな定義を書くだけのもっている方もいるかもしれませんが、辞書の項目も著作物ですから、辞書を編纂または執筆している側としては、それぞれ種類の違う知的生産は楽しいものです。もちろん、自分の本とは違って我を押さえて書く側面はありますが、そこにも工夫を凝らす楽しみが隠れています。

インフラ整備の中には、語学の教科書も含まれます。ASAFAS では、最初の頃はアラビア語の授業も自分でやっており、教科書作りにも乗り出しました。共著として『イスラーム世界研究のための現代アラビア語マニュアル 2008』(小杉・岡本・竹田 2008) を出しました。教科書なのですが、「マニュアル」と名づけているところにインフラ整備の気持ちが入っていると思います。この教科書は何度も改訂して、2018 年には『中東地域研究のためのアラビア語：実践文法と用例』(小杉・岡本・竹田・ハシャン 2018) という題名に落ち着きました。教科書とは別に、副教材も作ってきました。

研究の方法論や技法、学界動向を論じる雑誌も作りました。最初にそれをしたのは、国際大学時代の『現代中東の知的世界』(1987-1988) でした。題名に示されているように、中東の学术界や文化人についての情報を提供するインフラを整備しようとしたのです。京都大学では、『地域研究スペクトラム：地域研究の発展をめざす学術情報誌』を 1998 年に創刊しました。2004 年まで刊行しましたが、「デジタル情報化時代の研究作法」というような座談会 (小杉・林・赤堀・保坂 2000) をして、パソコンで論文を書く時代に中堅の研究者たちがどのような技法を用いているのかを披露していただきました。

学術的な雑誌は、研究のインフラとしては昔からあるものですが、その面では、国際大学時代の『国際大学中東研究所紀要』(1985-1993)、京都大学では、この『イスラーム世界研究』(2007-)、2019 年に立命館大学に移ってからは英文の *Journal of the Asia-Japan Research Institute of Ritsumeikan University* (2019-)、*Asia-Japan Research Academic Bulletin* (2019-)、和文の『立命館アジア・日本研究学術年報』(2020-) を手がけてきました。デジタル化・インターネット時代に合わせた成果発表の場として、新機軸の『アジア・マップ：アジア・日本研究 Web マガジン』というものも作りました。アジアの地図の上で、どこかの国をクリックすると、その国に関する学術情報が掲載されたページに飛ぶようになっています。

国際大学時代は、原典翻訳シリーズの「中東学」叢書や、出版社から研究成果のシリーズも出し

ました。こうしてみると、自分の本を出すだけではなく、インフラ整備にずいぶん関わってきた気がします。

研究成果のシリーズ化をした時に、自分が執筆を担当する番が回ってきて、『現代中東とイスラーム政治』（小杉 1994a）を刊行しました。「イスラーム政治」という用語が題名に入っているのは、日本ではこの本が初めてだったと思います。幸い、サントリー学芸賞をいただいたのですが、その時に編集者の方が、「うち（昭和堂）は、こういう賞の常連の出版社ではありませんから、小杉先生の実力だと思ってください」とおっしゃってくださいました。

「知のインフラ」整備に貢献する形式として私が提唱したものとして、ほかに、「主題年表」、地域言語の「専門用語集」などもあります。「主題年表」のほうは、「イスラーム復興」や「近現代のイスラーム世界」を半ば作ったものの、まだ公刊には至っていません。

なお、「知のインフラ」整備の一丁目一番地は、昔から実践されてきた原典史資料や研究書の収集です。国際大学、京都大学で、日本トップクラスのアラビア語コレクションを作ったことは、すでに申し上げました。2012年に天皇陛下から紫綬褒章をいただいた時に、「地域研究の基盤整備と発展、特に中東地域研究とイスラーム学の発展への貢献」が評価されてのことだったのは、とても嬉しいことでした。

新しい「イスラーム学」は可能か

地域研究の方法論などは、40年間の間に十分に論じてきたと思いますが、「イスラーム地域研究」を始めて以降、それに資すべき分野としてのイスラーム学のあり方が問題となりました。イスラーム地域研究を実施している時に、それは「イスラーム地域の研究なのか、イスラームを加えた地域研究なのか」という問いを歴史学者から聞かれたことがあります。地域研究者からすれば、地域と研究を2語に分けることはありえませんが、「イスラームを加えた地域研究」というのが正答ですが、東南アジアとか北東アジアとか、サハラ以南アフリカとか、地域名を冠するのが原則の地域研究において、イスラームを冠することが許されるのか議論となりました。

私自身は、イスラーム世界を構成する諸地域を「イスラーム地域」と呼びうるが、それは既存の地域と重なり合うので、世界の諸地域の中でイスラーム色が強い地域を補助線として「イスラーム学」の助けを借りつつ研究するのが「イスラーム地域研究」であると定義づけていました。

そもそも「地域」とは、国民国家よりも上位で、地球社会よりも下位の単位です。20世紀の国際社会は国民国家の主権を認め、国際社会を主権国家の総和とすることで平和を実現しようとしたのですが、実際にはナショナリズムに基づく主権国家はしばしば戦争の主体となりました。それを乗り越えるために、「地域」という上位概念を設定したのが地域研究です。第2次世界大戦後にアメリカで発展した地域研究は、超大国となったアメリカが世界をうまく運営するために各地域についての知識が必要という戦略的な視点が入っていましたが、日本の地域研究は全く異なっていて、平和への希求が研究の基本にありました。

地域研究は究極的にはグローバルな地球社会に向かうべきかもしれませんが、すぐにはそうはいきません。地域を超えるという意味では、地球社会は「メタ地域」ですが、地球社会より規模の小さなメタ地域もありえます。最近では「グローバル・サウス」がそれに当たります。かつては東西冷戦下で「自由主義陣営（西側）」「社会主義陣営（東側）」というメタ地域があり、それに対抗して「第三世界」「非同盟諸国」や、「アジア・アフリカ会議」に示される「アジア・アフリカ」というメタ地域もありました。イスラーム世界も、そのようなメタ地域の1つと言えます。

さて、そのような地域を対象に研究する時に、イスラーム学が役立つでしょうか。「イスラーム研究」という言葉は、英語でもアラビア語でも使われますし、中立的な響きがあります。イスラーム学と言ってしまうと、かつての東洋学におけるイスラーム研究、つまりオリエンタリズムの一環としてのイスラームをめぐる言説のような響きが出ます。他方、アラビア語では「イスラーム学」とは言いません。「ウルームッディーン（宗教諸学）」は、あります。かつてガザーリー（1058-1111）が『宗教諸学の復興』を著したように、イスラームにおける規範的な学問体系です。そうすると、東洋学的なイスラーム研究でもイスラーム世界内の宗教諸学でもない、第三のイスラーム学を構築することはできるかということが問いとなります。

2013年から5年間実施した、科研費・基盤研究(A)「グローバル化時代に対応する21世紀型イスラーム学の構築」研究プロジェクトは、それに答えを出すことをめざしました。5年後の提言「21世紀型イスラーム学の拡充と活用へ向けて：5項目の戦略的提言」（小杉・研究チーム 2017）では、

〔21世紀型イスラーム学は〕非イスラーム圏を対象とする地域研究者はもとより、宗教学、人類学、政治学、経済学などを含めて、より広範に他の人文社会科学の専門家と共有できる〔ものでなければならない〕。……21世紀型イスラーム学の具体的なサブディヴィジョンとしては、イスラーム世界において伝統的な学問分野が今日において再活性化しており、個別の研究が必要とされる分野として、タフスィール（啓典解釈）学、ハディース学、法学・法源学、神学、タサウフ学があり、現代的な要請によって個別分野として新たに編成された分野として、イスラーム政治学、イスラーム経済学があり、さらに編成すべき新分野として諸宗教・諸宗派学がある（合計8分野）。（小杉・研究チーム 2017：127）

と述べていますが、この提言に基づく継続プロジェクトは採択されず、代わりに、次に述べる「法源学」プロジェクトが採択されました。新しいイスラーム学は可能である、とはいえ、現実的には課題の多くは今後に残されています。

もう1つ付言すると、「理念」としてのイスラームというと、かつてはフィールドを専門とする人類学者の方から「現実社会の中のイスラームは、そのような『教科書的』で『一枚岩』的なイスラームとは違う」と言われることがありました。しかし、それはイスラームの理念についての誤解なり無理解に基づいています。もし、一枚岩的なイスラームが理念だとすれば、思想研究は成り立ちません。理念であっても人間の営みである以上、多様かつ複雑なものです。

またイスラーム世界のように（複雑な）理念が非常に強く作用する地域では、理念を無視して、現実の社会の中から地域の人びとが信じているイスラームを抽出するというようなことは、非常に困難です。理念と現実はそれぞれに多様で、その上で社会の中では相互に作用し合っているという前提で、補助線としての新しいイスラーム学を考えることが大事です。

イスラーム法源学研究と今後の展望

2019年に京都大学を定年になり、立命館大学に移りました。副総長をなさっていた文化人類学者でレヴィ＝ストロースに詳しかった渡辺公三先生（1949-2017）から、設立まもないアジア・日本研究所の内実を創る仕事を頼まれたからです。お引き受けした理由の1つは「アジア」というところでお役に立てるのではないかと思ったことです。古くは、1970年代にアジア・アフリカ作家

会議の事務局で働いていました。国際大学では、中東・西アジアを中心とする地域研究に励み、京都大学では東南アジア、南アジア、西アジアの研究者が連携する中で地域研究を展開しました。その意味で「アジア」には非常に親和性があったのと、実際にアジア各地を専門とする研究者との人的ネットワークがありました。

研究面では、これまでの6年間、「イスラーム法源学」研究を手がけてきました。『イスラーム世界研究』にも毎年論文を掲載していますので、お読みいただいている方もいらっしゃるかと思います。

シャリーア＝イスラーム法が、イスラームの基幹をなしていることは周知の通りですが、現地における知の体系としては、ずっと「イスラーム法学」で代表されてきました。しかし、イスラームで言う「法学」は、クルアーンやスンナ（預言者慣行）を典拠として法解釈によって導出された法規定の総和に関する学問で、法解釈そのものを扱うものではありません。しかし、イスラーム復興によってシャリーアが現代に復権するということは、法解釈の革新があるからで、法解釈の学問である「法源学」を解明しなければならない、と近年思うようになっていました。

ちょうど立命館大学に移る年に、科研費・基盤研究(A)「現代イスラームにおける法源学の復権と政治・経済の新動向：過激派と対峙する主流派」を採択いただきましたので、5年間にわたって法源学研究を実施しました。その中で、イスラーム法のいわゆる「法規定の5範疇」というものが西暦12世紀までに確立されたということを実証できました。これはイスラーム世界の中でも、欧米でもこれまで明確には言われてこなかったことなので、国際的にも新知見と認められる内容だと思います。すでに英語論文は1本書きました(Kosugi 2022)が、もっと海外へ向けて発信すべきか、悩ましいところです。

今日も皆さまにお話ししていて、自分でもずいぶんと手を広げて多様な分野に関わってきたと思うのですが、その一方で、研究発信の方向が自分の母語である日本語話者にずっと向いていることを再認識いたしました。最近の若手の方を見ていると、国際発信のほうが盛んな方もいますので、時代の違いを感じます。

とはいえ、国際的な研究協力には、ずいぶんと注力してきました。最初に英語論文を書籍に載せた(Kosugi 1991)のは、1987年に英国ダラム大学で国際シンポジウムを実施した成果としてでしたし、ダラム大学とはイスラーム経済研究で2007年以来、一貫して連携してきました。

マレーシア国民大学とも、2008年からの交流があり、同大学からハキミ・シャフイイさん、ヌル・イッザティ・ノルズィランさんが京都大学に留学して学位を取得したり、同大学のイスラーム文明研究所とは、2010年から12年にわたって毎年国際会議を開催しました。2012年に同大学から、名誉博士号(イスラーム文明学)をいただいたのも、ありがたいことでした。

2023年には、同大学と京都大学、立命館大学の間の研究協力協定をベースに、年次の「イスラーム・ハラール経済研究」国際会議を開催し、2024年にはその母体として「イスラーム・ハラール経済研究コンソーシアム」も設立しました。

かつてマラヤ大学副学長補をなさっていたオスマン・バカル先生とは、マラヤ大学、ブルネイ・ダルサラーム大学、今ではマレーシア国際イスラーム大学を舞台に研究協力しており、30年の付き合いとなっています。

アラブ諸国では、エジプトのアズハル大学、カイロ大学、アラビア語アカデミー、ヨルダンの世界イスラーム諸学教育大学(WISE)などと深い交わりを持ってきました。WISEの理事長のガーズィー王子とは、1990年のケンブリッジ時代からの付き合いで、最近のイスラーム法源学研究で

も、いろいろとお世話になりました。ガーズィー王子の著書（ガーズィー 2021）を翻訳することにもなりました。

国際的に付き合いを考えると、しばしば、もっと英語での発信を心がけるべきかと自問することがあります。その一方で、「日本語共同体」へ向けて知の貢献をするのが主務とも思います。カイロに留学した時は、「現代の遣唐使のような役目を果たしたい」と大それた夢を抱いたこともありました。つまり、西洋近代の知の導入による発展が限界を迎えている今日、アラビア語を共通語とする世界（アラブ世界、イスラーム世界）の知を日本に持ち帰り、新しいブレークスルーに貢献できないかという思いです。この面での造語もあります。（文明の対話ならぬ）「文明の鼎談」論（日本・西洋・イスラーム世界の3者対談）、「文明カタログの総点検」などです。

しかし、人生 100 年時代と言っても、活発に知的生産ができる年齢は 100 歳まではありませんから、残りの時間をどこに配分するかという問題はあります。かつて、田中浩先生（1926-）というホップズ研究で有名な方と親しいおつきあい（いくつもの田中先生の編書に寄稿）をさせていただきましたが、田中先生がある時、「70 歳代でしっかり仕事をするには、60 歳代をがんばる、80 歳代でしっかり仕事をするには 70 歳代をがんばるのが大事」とおっしゃっていました。ご本人は、90 歳を過ぎてもご著書をお出しになっていますから、是非ともご助言に従いたいものと思いますが、時間配分の検討はいずれにしても必要です。

古希を過ぎた今、優先順序はやはり日本語での著作かと思います。1 つ目はイスラーム法源学研究の成果を本にまとめることです。2 つ目は、現在、科研費・基盤研究 (B) を 5 年間いただいて、「21 世紀イスラーム思想の 3 つの潮流：近代的普遍をめぐる対立と法典の現代的解釈」を実施していますが、「典拠と解釈」をめぐる本をまとめたいと思います。しかも、このプロジェクトは、アラビア語が専門ではない研究者のための「参照点」となるようなサイトを立ち上げることを目的の 1 つに入れていますので、なすべきことはたくさんあるだろうと思います。

思想史研究者としての私は、実は「典拠と解釈」をめぐる方法論を生涯の主題としているのですが、クルアーンを題材にして、論文を何本も連作する計画が、序論に相当する論文（小杉 1994e）を出してから、他の仕事に追われてずっと止まっています。これを再開して、これからの 10 年を過ごしたいという気持ちも強くあります。

私は研究者は「物書き」であるべきと思ってきました。京都大学に来て、法学研究科から博士号をいただいた頃（1999 年）、主査をしていただいたインド政治の専門家である木村雅昭先生（1942-）に、「研究者は嘶家」と伺い、確かに授業や講演も大事な仕事ですので、それ以降、研究者は「物書きで嘶家」と言うようにしてきました。もう 1 つ、研究者に欠かせないのは、プロジェクト遂行能力です。その中には研究集会などでのログも入りますが、それ以上にスケジュール管理が大事だろうと思います。

古い時代には、研究者は「Publish! Or, perish」（刊行せよ、さもなくば消え失せよ）と言われましたが、今では、論文や本を書くだけではなく、オーラルなプレゼン、研究活動の組織化の仕事が不可欠です。テレビ出演も、仕事のうちですね。私は時事物の番組にはほとんど出たことがなく、NHK 教育テレビでいくつも番組を作りましたが、今は SNS 時代ですので YouTube も含めて動画の制作も欠かせないように思います。私のデジタル化は、今のところ、インターネットにしてもテキスト情報がベースではありますが。

コロナ禍の時期に国際人流の途絶などがあって、デジタル化が切り抜ける道と思って DX（デジタルトランスフォーメーション）の強化を唱えましたが、その一方で、デジタル化が進めば進むほ

ど、アナログとは何かをきちんと把握しないといけないと思うようになりました。何がアナログかは自明のようですが、社会の中で自明視されることを取り出して言語化することが地域研究の極意であると思えば、自明であるからこそ探究したいとも思います。

地域研究の将来

最後に、地域研究の将来について一言、申し上げたいと思います。

学問とか学術分野は、その名の学会があるか、大学院教育を通して学位授与が可能であれば、存在していることになります。日本で初めて「博士（地域研究）」を授与するようになったのは、ASAFASですので、それが設置された1998年に、地域研究にはそのような制度的な裏付けができたと言えるかと思います。学会のほうは、日本中東学会と、日本アメリカ学会、日本カナダ学会などと相談して「地域研究学会連絡協議会」というものを2003年に設立しました。現在の加盟学会数は20です。これが基盤となつて、日本学術会議でも、2005年の組織再編の時に地域研究委員会が設置されました。私は第1部会員として（2005-2011）、地域研究委員会の下に「地域研究基盤整備分科会」を設置して、その委員長として「グローバル化時代における地域研究の強化へ向けて」という提言を2008年8月にまとめることができました。

他方で、20世紀後半には、「地域研究」がどうあるべきかとめぐって、2つの争点なり論点がありました。1つは、地域研究が新しい学術のブレークスルーをもたらすべきとの立場から、西欧をも「地域」に含めて、近代知の再編をおこなうべきという点をめぐるものです。現代の知の危機は、西洋型の近代知が限界を迎えているためだという認識から、西欧を普遍的な近代そのものとみなすのではなく、近代も西欧という地域の特性から生まれたと理解して、多様な地域の文明によって西洋文明を相対化するというねらいがあります。

もう1つは、「地域研究」一般はあるか、という論点です。中東地域研究とか、東南アジア地域研究、アフリカ地域研究という地域の「冠」が付いているのが普通ですが、研究の方法論は共通しているわけですから、地域名を冠にしない「地域研究」があつてしかるべき、という考え方です。

皆さまもご存じのように、アメリカにおける地域研究は第2次世界大戦後に超大国としてのアメリカが世界を運営するために、個別地域の実情を把握すべきという戦略的な理由で発展しましたが、1989年に冷戦が終焉すると、グローバル化が進展する中で、もはやいろいろな地域の固有性を考える必要はない、普遍的な原理（市場経済、民主化など）が地球全体に広がるのだという雰囲気が出て、地域研究に逆風が吹きました。ただ、中東、イスラームに関しては、9.11事件のインパクトがあつて、21世紀には研究に対する需要が復活しました。

日本の地域研究は、20世紀半ば以降、地域に根ざした平和な地球社会を希求する流れに向かつて発展しましたし、冷戦後のグローバル化も、世界をよく知るべきだという観点から、日本では地域研究にとって追い風となりました。

とはいえ、地域研究の需要が高まり、研究者も増え、大型プロジェクトも次々と実施される中で、さきほど申し上げた、西欧をも地域として研究するという目標は限界を迎えたと思います。肝心の西欧を対象とする研究者の皆さんは、ごく一部を除いて地域研究にほとんど参入しませんでした。

2番目の地域名を冠しない地域研究についても、その議論はまだ十分には深まっていないと思います。世界のどこかの地域に対して強い関心を持つことが、地域研究者の共通項だとしても、どの地域に興味を抱くかがその地域を研究する熱情の基盤となっているのが大半ですから、冠付きの地

域研究学会がそろって「地域研究学会」となることは、現状では考えられないだろうと思います。

2000 年から 3 年ほど続いたコロナ禍では、国際人流が途絶して、フィールドワークを基盤とする地域研究には、いろいろな困難が生じました。その中で、研究の DX（デジタルトランスフォーメーション）を推進する傾向も強まり、デジタル化、サイバー空間の広がりをも対象とする研究が生まれてきました。それ以前から進んでいたデジタル・ヒューマニティーズの強化も、地域における SNS の分析などの新分野も出てきて、今後に期待が持てます。

地域研究は、地域の「固有性」を追究することを課題としていくべきだろうと思います。グローバル化で地域差が低減するという考え方もありますが、そもそもグローバル化は不均衡なプロセスですから、グローバル化による均一化の面があるとしても、グローバル化の地域差にも目配りが必要です。

総じて言えば、「平和」を希求する学知としての地域研究を考えるならば、その課題はまだまだ続きます。皆さまには、地域研究をさらに発展させ、人類の危機を乗り越えるブレイクスルーをもたらすために尽力を続けていただきたいと思います。研究者に「定年」はありませんので、私も力のある限り、知的生産を続けていきたいと思っています。

本日は、ご静聴どうもありがとうございました。

***** 質疑応答 *****

司会（黒田彩加）：小杉先生、貴重なお話を数多く聞かせていただき、ありがとうございました。それでは、質問をお受けしたいと思います。

米田優作（立命館大学）：地域自体がグローバル化しているという中で、研究対象次第では、中東地域研究という特定の国や地域の枠組みだけではなくて、それを超えたグローバル・イスラーム地域研究のようなものも構想できると思われませんか。

小杉：そのグローバル・イスラーム地域研究は、どこにグローバルがかかっているのでしょうか。

米田：私が想定していたのは、例えば「抵抗の枢軸」やイスラーム解放党のような主体です。そのような主体自体が、グローバルな領域で活動を展開しているような状態です。

小杉：イスラーム地域研究という言葉自体に、そもそも越境的研究や広域比較ということが埋め込まれていますから、それを超えてさらにグローバルということはないと思います。すでにグローバルという面は含まれているのではないのでしょうか。

米田：イスラーム地域研究自体にグローバルな意味が内包されているということですね。

小杉：そういうことになりますね。イスラーム地域研究とは何かという定義は色々考えられますけれども、イスラーム世界を構成している諸地域というのがあり、イスラームという要素が非常に強いので、それを地域横断的に見るということです。

さきほど申し上げたように、イスラーム地域研究の対象は、〔単なる〕地域ではなくてメタ地域